

415
142

報恩の生活

岡本多佳



始



特229
181



の生活

岡谷



序

二十五、六年前である。

東京から團體で本部にお詣りに来て、お授けを頂いた。皆がまた團體で歸るので、私もその仲間に入った。まだ春寒い頃であつたと記憶する。私は小さな手提げ鞆を一つ持つて丹波市の驛に行くと、そこに會長様がをられて、「關さん、あなたは東京に歸るのではありませんよ。これから大阪へ布教に行きなさい」と仰有つた。私は、「ハイ」と受けて、その足で大阪へ行つた。

私は商賣でさんぐ失敗をして信心に入つたので、謂はゞ裸一貫

で教會に飛び込んだのである。その時私はかう決心した。

「俺は、たんのうと、すなほどで押し通さう。これは誰に相談する必要もない。私一人の精神で行けることだ。どうせやるなら、この行き方に徹底しよう——」

すなほ になると神様にお誓ひしてゐたので、どのやうなことをいはれても「ハイ」と受けてゐた。この時も、それであつた。

たんのう は、如何に苦しい中をも定めた心を貫き通す、偉大なる建設精神である。泣きの涙で通るのではない。飽くまでも、喜び勇んで苦しみの中を通るのである。

すなほ は、一點の私なく、天の命するまゝに、動くことである。それは所謂、滅私ではない。我々の魂は神様の分魂であるのだから、本来の私に歸つて、本来の私のまゝに動くのである。だから、「たんのう」と、「すなほ」これさへ十分に出来れば、何もいふことはない、私は信じてゐるのである。

大阪の布教から轉じて、神戸に布教して今年は二十年になる。この間に私は前記二つの信條に、

報恩

の一つを加へた。

恩を重ねるばかりの生活に、「たんのう」も「すなほ」も、斷じてないと思つたからである。そして、今日では寧ろ、報恩一路を目標とすることゝなつた。報恩の生活の中に、眞の「たんのう」があり、眞の「すなほ」があることを知つた。

本書は、かういふ信條から、斷想を書いて編んでみた。胸の中には、燃え上るものを感じながら、どうもそれを十分に表せなかつた。強て秃筆を呵すと雖も、意餘つて筆足らざるの感がいよく深い。

たゞ、今年は、私をして今日をあらしめて下さつた東本の初代会

長の二十年祭が執り行はれるに當つて、この小冊を出し得たことを喜びとするのである。

三月二十二日

著者識す

目次

布教座談	一
飢に克つ	三
耳から口へ	三
申譯なし	四
口と心	五
私一人	七
儉徳記	八
徳を積む	九
神經戰	一〇
涙と微笑	一三

顔	一四
一をもつて貫く	一四
阿呆の功名	一五
運命の鍵	一六
感恩	一九
報恩一路	二〇

布教座談

「いやに鬱ぎ込んでるぢやないか」

「やつぱり、さう見えますか。欺けませんね。實は譯があるので
す」

「大分、むつかしさうな譯らしいね。僕には、布教師のヒステリー
は苦手なんだ。まあそんな貧相な顔をしないで、もうちつと、男ら
しい顔をし給へ」

「あなたはさう仰有いますが、私は眞剣なんですよ。餘りからかは
ないで下さい」

「どうです、布教生活一年、信心の妙諦がわかつたかね」

「それがわからないのです。わかつてをればこんな惨めな姿をお目
にかけやしません。一年間といふものは一生懸命にやりました。し
かし、いんから喜べた日はありませんでした」

「あなたは、布教に出る日に、神様に何とお約束し、お誓ひしたん
ですか」

「明日からは、我が身我が家のことを打ち忘れて、たゞ人助けに奔
走いたします。この己れを空しうして、世のため人のために助け一
條の道を突進いたしますと、心にありつたけの力をこめて申上げ
ました」

「その時、さういつてお誓ひ申上げてゐるうちに、何となく心が嬉
しくならなかつたかね。己はこれから、かういふ道を歩むのだと思
ふと、今まで闇のやうだつた心が、ほのくくと明け初めて来るやう
な感じ、そして、いひやうのない嬉しさが腹の底からこみ上げて来
なかつたかしら——」

「無我夢中でしたから、そんな記憶しません」

「正直にいつてくれ給へ。僕は遠慮なくいふよ。いゝかね。その時
の君の顔は、この世の悲痛は自分一人にあり、といふやうな面相だ
つたと思ふね。心の夜明けとか嬉しきなんか微塵もない。却つて心
は暗く閉されてゐたんだと思ふ。君は無我夢中だつたといふけれど

も、その實は、悲痛なる無我夢中だらう」

「……………」

「凡そ、神様においのりして、心が嬉しくならぬといふのは、その決意が神様に受けとつてもらつてないんだよ。僕の経験を物語らう。」

教祖四十年祭の倍加運動の提唱があつた時だ。高安大教會では前會長が熱辯を振はれた。僕は部下の一布教師として、拜殿の隅つこに小さくなつて聞いてゐた。その中に、話に身が入つて來ると、身體中が熱つぽくなつて來た。よし、自分もこの波に乗つて、教會を設置しようと思つた。まづ一ヶ所ぐらゐ——と思つてみるが満足でき

ない。それでは二教會——まだ、氣持が浮いてこない。よし三教會——これも手應へがない。とうとう五教會までできてしまつたが、その時、漸く嬉しくなつてきた。その嬉しさ、あの氣持は、今に忘れられない。心がいそ／＼してくるのだね、後でこの氣持を上級の先生にお話すると、それは、あなたの決心が神様に受取つてもらへたんだ、と仰有つた。

人間同志だつてさうぢやないか。人様に珍しい物を持つて行つて、先方が心から喜んで下されば、こちらも實に嬉しい。先方が満足しなくては、折角持つていつても甲斐がない、がっかりする。

神様にお供へした心が、神様に喜んでもらへるものであつたら、人

間の心が明るくなり浮いて來、嬉しくなるのは當然だと思ふ」

「さうすると、私の決心は、まだく不十分だつた譯ですね」

「どうも、さうらしい。だから君は勇めないのだ。勇まうと思つても勇めない。そりやあさうだ。食ふ物もない、着るものもない、家に歸つても火の氣もない、かういふ布教生活の中で、努力して勇まうとしても駄目だ。勇ますにはゐられなくなる根柢がないのだから駄目だ」

「それでは、もう一度決心のしなほしをするのですね」

「君の心が嬉しくなるまで、次から次へと、負擔を大きくしてゆくのだ。」

神様においのりするといふことは、これから、一生懸命にやつて心の埃を拂ひ、神の分魂として恥ぢないだけの活動をいたします、神の分魂の面目を生します、といふことである、それは、飽くまでも自らを責めることである。信徒の精神が出来ないとか、妻がみちの精神に理解がないので苦勞のし甲斐がないとか、自分のなし能はざるを人の罪にしないで、どこまでも、己れ一人を責め抜いてゆくのだ。自ら責めて、自ら苦しみの道を歩む時には、深刻な苦勞をしてゐても、自分では少しもさう感じない。苦勞どころか、嬉しくて有難くてしようがない。

僕のことをいふのはどうかと思ふが、僕が大阪で布教してゐた最初

の一年半は、僕の信心生活の最頂上だと思つてゐる。

眞冬になつても、足袋もなかつた、バツチもなかつた。雨の夜などお助けに行くと、傘を持つてゐる手が柄に凍りついてゐたこともあつた。なんでもその夜は、あちら、こちらとお助けに廻つて、夜通し歩いた。最後の家を出て教會へ歸る途中で、しら／＼と夜が明けて來た。私は、たゞ／＼有難くて、東本の會長様に心の中で合掌した。

夏になつても浴衣がなかつた……汗拭きといへば、煮べのやうになつた手拭が一枚、どんな暑い日中でも、電車に乗らないでテクテクと歩いた。浴衣がないので、冬からのぬいこを着てゐた。すると或

るお助け先の大家の奥様が、

「この眞夏に、よくまあそれで我慢できますね、先生は暑くないのですか」

といふのだ。僕は腹の中で笑つた。自分は明石の肌も見え透くほどの着物を着てゐてさへ暑い／＼といつて扇を使つてゐるぢやないか。綿入が暑いか暑くないか、聞くだけやぼなことだ。——こんな人に、ハイ暑うございますと、同情を求めらるやうな奴は尙更、どうかしてゐる。かう思つたので、

「却つてこの方が涼しいのですよ。奥様のやうな羅では眞夏の陽が身體に透つて暑いのです。僕の綿入は、陽が透らないで蔭にな

るから丁度、いゝ加減なんですよ」

「まあ、先生もずる分負け惜しみの強い人ですわね——」
かういつて二人は笑ひ會つた。

その後で、僕がこの話をすると、「先生、それだけはもう仰有らな
いで下さい。どうして、私はあんな思ひ遣りのないことをいつたの
でせうね。何もいはずに、浴衣を差し上げればよかつたのに」とい
つて赤面する。それで僕は、「あの時、あなたが浴衣を出して下さ
つたら僕の話の種がなくなつてゐる。神様が僕に苦勞をさしたかつ
たのですよ。浴衣を下さらなかつた奥様は僕の苦勞の恩人だ」
といつて、何時もこの話が出る度にお禮を申上げてゐる。

ですから、自らを苦しめて通るみちには苦勞がない。苦勞を意識す
るやうでは、まだ責め方が足りないのだね」

「信者が出来てゐることは出来てゐるのですが、どうも、もう一つ
眞劍になつてくれる者がいないのです。私は、不徳の致すところと、
さんげしてをりますが、一番つらいことは、私が話し下手なん
です。先生、どうかお話を聞かせて下さいといはれても、十分なお話
が出来ないで困つてゐます」

「話なんか、下手でも人は聞くよ。君が、人の話を眞劍に聞けば、
どんな下手な話でも眞劍に聞いてもらへる理が生れるよ」

「私の聞き方が悪いのですね」

「君は、上級のお勤めに行つた時、假に三席のお話があると三席とも聞いてゐますか。會長の話だけ聞けば、後はどうでも良いと思つてゐるのではありませんか」

「どうも、さうですな」

「聞き方が悪いどころか、聞いてゐないんだ。聞いてもらへないのが當然だよ」

「しかし、どんなに眞剣に聞いても、私の話下手はしようがありませんね」

「君は、己は話が下手なんだと自覺してゐる、僕はそれがとても良

いと思ふね。そこで、忘れてはならないことは、その自覺にもとづいて、信者にも神様にも、十分なお話が出来ませいで申譯ございませんと、心中お詫び申すことだ。下手だからといふので、自分の身に経験もないのに人の話を盗んでみても、しようがない。そんな話は決して人の魂を育てない。お詫びだけでよい、それが立派な教理となつて、先方に通じる。必ず通じる。

お詫びしてゐる君の心の恰好は、とても低くなつてゐる。信者よりも低くなつてゐる。低い心が尊い。失禮だが、君、この理合ひが判りますか」

「え、まあ。しかし、それだけでこの世の中が往けますか知ら、

この間もある男が、私に恩を仇で報いるやうなことをいふてまゐりました。その男といふのは、その日暮しの貧乏人で、加へて病氣で苦しんでゐるところを助けてもらひ、私の手引で或る會社に入つたのですが、結構になると昔のことを忘れてゐる——」

「君も×氏と同じやうなことをいふね」

「×氏も、こんなことをいつてをられましたか」

「まるきり同じだ。つい先日のことだ。〇君も△君も皆、僕が引上げてやつた男だ。僕は恩を賣らうといふのではないけれども、人情紙よりも薄しと世間でもいふが、立派になると引上げてもらつたといふやうな顔もしてゐない。實に僕は情けなく思つた」とかうな

んだ。そこで「貴方は大勢の人々を引上げてやりなさるやうだから、一つ、この教會の青年も引上げてやつて下さい、それくらゐの腕はおありでせう」といふと、「それは出來ん」とてんで相手にしない。

「さうでせう。〇氏も△氏も、皆貴方が引上げてやつたには違ひありませんけれども、△氏や〇氏にも、引上げられる徳があつたのでせう。あなたは先方の徳を忘れて、自分の徳だけを稱へようとするから矛盾が出來るんですね」かういふと、さすがに理の判つた人だけに、成る程と、頷いてをられた。

失禮ですが、君、人助けをしてゐる者は、常にこの心構へがないと

駄目だよ。一體君は、一年、布教して何軒の信者が出来た、

「お恥しいですね。どうやら五軒ぐらゐ」

「五軒とも、くらいといふ程度なんだね」

「おそれ入りました」

「話は初めに戻るが、君は布教に立つの日、實に沈痛な決心をしたね。病人が君の顔を見ても、心が明るくなるやうな顔をしてゐなかつたね」

「その時の自分の顔を見た覚えがありませんから判りませんが、心持から考へると、多分さうだつたらうと思ひます」

「だから君は一生懸命に苦勞したといふ割に、人を導けなかつたん

だよ。極端にいふとね、君は、布教してゐましたといふよりは、天理教に入りなされるなよと、斷りに歩いてゐたんだ」

「まさか、そのやうなことはありません。一人でも助けたいといふ心ばかりでした」

「君はその氣持かも知れないが、僕から見ると決してさうぢやない。

お助けに道を歩いてゐても、ふと我が身思案が浮ぶ。天理教になつたばかりに、こんな苦勞をする」と情なくなるゝことがあるだらう。何處へ行つても頭を下げてばかり、馬鹿らしいなア」と思ふこともあるだらう。こんなことが絶対にないかね」

「人間である以上は、時々、仕方がないと思ふてゐます」

「だから断りに歩いてゐるといふんだよ。天理教になると、僕のように辛い顔をして、貧相な姿をして、苦しいことばかりなんですよ。つまらないからおやめなさい——と、断りに歩いてゐるんだ。人の従いて来さうな道理がない。

どうでせう。これまでの一年間は棒に振つて、心機一轉、嬉しくて嬉しくてたまらんといふやうな布教をしませんか。どうせするならば、愉快な布教をしようぢやないか」

「わかりました。只今、神様に決心のしなほしをいたします。仰有る通り、嬉しい氣分の湧いて来るまで神前に坐つて、決心を練り直

してまゐります」

「さうし給へ、僕も願はして貰はう——」

暫くすると、彼は元氣に溢れてやつて来た。来た時とは、まるつきり違つてゐた。

「嬉しくなりました」

「やあ、嬉しさうだね——」

「嬉しくてくたまりません」

「どこまで往つた」

「今年中に、千人の人にお授けを取次ぐ決心をしました。仰いで天

に愧ず、俯して地に愧ずんば、何れのところにか懊惱煩悶あらむや
——教典第十安心章の精神が、ブーンと胸に響きました。もうこ
れで安心です。きつとやります」

事をなし上げてから安心立命するのではなく、彼は事成るの前か
ら、心安らけく、勇み立つて往つた。

飢に克つ

泣いてゐるかと思ふと笑ひ出す、笑つてゐるかと思ふと泣き出
す。お人形が氣にいつて夢中に遊んでゐるかと思へば、未練をなさ
ず投げ出して繪本に見入る。

無心に遊んでゐる幼児の表情と行動とは、全く大人の想像を超え
た世界にある。彼には次の豫定がない。環境の變化にとまなつ
て、彼も亦無限に變ずる。これは全く大人の端倪を許さない驚くべ
き變化である。

心が固定してゐないからである。まるい、やはらかいその心は、

どのやうな變にも、わだかまりなく應じる。その姿が、大人が見るとき、たまらなく可愛いのである。

もしも、幼兒が泣きもせず笑ひもせず、石のお地藏様のやうに黙りこくつてをれば、それでもなほ可愛さがあるだらうか。

こゝに二つの魚がある。

一つは鱚の干物である。カラ／＼に干からびたこの魚は、焼いて食ふより外にしようがない。

一つは生きのよい鯛である。鮑丁を入れると血が流れる。鱗をとるとビチとはね返す。焼物にしよう、刺身にしよう、煮附にし

ようと、それは料理人の自由である。この鯛の新鮮さが持つ變化の世界はまことに豊である。

どんな變化にも應じられる豊かな魂を養つておきたいと私は念願する。

或る日かういふことを考へた。

もし日本が今日の支那事變より遙かに大規模の、勝敗いづれとも斷じ難いやうな戦争をする。物資といふ物資は、どん／＼と戦線に送られて銃後が非常に逼迫する。假に、代用食さへもなくなる日があるとする。

その時に吾々は一體どうするだらうか。

自分はどうでもよい、先づ人様のために、といふ日頃の信心に燃え立つて、僅かに支給された食物をも人に施してゆく。吾が身は、日一日と飢えてゆく。それでも、心は断じてひるまない。勇み切つてゐる。教祖様は七十五日も絶食されたではないかと、心に鞭うつてゐる。——こゝらあたりまでは、今日の吾々なら何とか出来さうに思へる。

だが、それから先はどうであらうか。

戦線の勇士は、天皇陛下萬歳と叫んでたふれる。銃後と雖も、困苦欲乏に堪へてお國を護つてゐるのだから、こゝも亦第一線である。飢えて斃れるのも、戦場に斃れるのも、姿こそ異れ、精神は同

一である。それでは、戦線の勇士と同じやうに、飢えてなほ、

天皇陛下萬歳を叫んでゆけるだらうか——。

こゝまで来て私はハタと行詰つてしまつた。それでこそ、眞の日本人であり、日本精神の眞骨頂はこゝに發揮される。さうあるべきが本當だ。凡ゆる立場において、その斃れるや、天皇陛下萬歳を絶叫し得るところまで勤めきるのである。これはよくわかる。さうあらねばならんと思ふ。

しかし、少くとも私自身は、何と考へてみても、勇ましい叫びを擧げられる人間とは思へない。

私にも後にも先にも、僅か十三日間の絶食をした経験がたつた一度ある。大阪に布教してゐた頃であつた。或る富豪の若夫人のお助けに運んだ時、一つの決心として、御守護を見るまでは水だけで暮さうと誓つたのである。

絶食一週間ぐらゐにおよんで、私は意外な発見をした。空腹を抱へて、毎日、二里、三里の道を歩いてお助けに通ふのである。その道で私の目に止るものは、たゞ食物である。私の嗅覺をそゝるものもたゞ食物だけである。それ以外は何一つとして目に止らない。どのような美人がをつても心が動かない。普通ならば、横目の一瞥くらは投げるところであるが、その時は、さういふ心は微塵もない

のである。

人間、飢ゑてなほ且つ命をうち込んだ仕事をしてゐる時といふものは、實に美しいと思つた。一切の慾望から離れるからである。たゞ一つ、心をひかれる食物に對しても、欲しいといふ氣が起らない。温かさうな焼芋を見ても、却つて、なにくそツ!! と、一片の焼芋にいどみかゝつてゐる。欲しいといふのではない。たとひ、今の自分を征伏するどのやうな強力なものが現れて來つて、斷じて負けないぞと、力強く反撥するのである。

人間、埃を積むのは、身心に餘裕のあるときである。かうして十三日目であつた。

私を導いて下さつた上級の會長様が、ひよつこりと來られた。お助けから歸つて、御挨拶に二階に上らうとした。しかし、足が上らないのである。これしきのことゝ、勇氣をふるつてみても、よろめく足は如何ともなし難い。漸く上つて、さて御挨拶をと、會長の前に坐つてみたが、聲もろくさまに出なかつた。やつと、「會長様……」と、かすかな聲が出たつきりで、後は涙ばかりであつた。

僅か十三日でこの態である。若し、これが二十日、三十日に及んで、然もその最後に、天にも通れとばかりに、天皇陛下萬歳を叫べるだらうか。今日の自分では、これは甚だ怪しい。

教祖様は、七十五日も水ばかりの日を送つて、勇み立つてをられた。私は僅か十三日で肉體だけではなく、魂までも干かん乾しになつてゐた。

肉體は喪家の犬のやうに干てしまつても、魂は八紘に充滿する力を持ちたい。生命を持ちたい。

結局は、徳の問題である。

徳のない者には、萬人に絶する苦勞は出來ないのである。徳のある人といふものは、人知れぬところに、天下國家を思ふて、實に慘憺たる苦勞をしてゐる。しかし、それが少しも表立たないのであ

る。

或る日、水戸光圀が、とある大名の行列の馬に頭を下げた。それを見た人が、どうしてそのやうなことをなされますかと聞いた。光圀は、

「お前の目についたか。それではまだく俺は駄目だ。わざとらしく見えるのは、俺の心に尙ほ、わざとらしいところがあるからであらう。……」といったといふ。

どのやうな苦勞をしてゐても、それを人目にたゞせたくない。日本精神は常にかく要求するのである。強て隠さうといふのではない。人目にたゞぬほど、さり氣なくやつてのけてしまひたいのである。

る。

あらうことか。私は僅か十三日の絶食の姿を、如何にも哀れ氣に、會長の面前に曝したのである。その私が、果して、飢ゑて斃れるの日、天皇陛下萬歳を叫べるだらうか。思へばたゞ愧しいばかりである。

かういふ日のために、私は、今日から、十分に徳を積んでおかねばならぬと思ふのである。

耳から口へ

何といはれても、馬耳東風と聞き流す人も困り者であるが、中には、耳から口へといふ人がゐる。耳から耳へといふ常道を外して、耳から口に。型からいふと、斬新の部類である。

「なせ、こんなことをしたんだ。いはれた通りに、やらねば駄目ぢやないか」

「實はその……」

一語を聞いてもこれを百にも千にも敷衍する雄辯家は、實はその……から始つて、申分のない申譯をする。

人がどうあらうと、仕事はどうあらうと、申譯さへ筋が立てば満足するのである。言葉の嘘も、こゝに至つてまた極れりである。いはれた通りに責を果し得なかつたことは、心に苦しい。何とも相濟まぬと思つてゐて、心のまゝにお詫びが出来ない。詫びると、自分の値打が下り、申譯の筋さへ立てば、身が立つやうに思ふてゐる。

何といはれても「ハイ」の一語でよいと思ふ。また「申譯ありませんでした」で治るのである。これほど使ひ易い言葉はない。智慧や學問がなくても、誰でもいへる言葉である。時間的にいつても、

これは簡単でよい。申譯をして、三十分かゝるところを、これなら、一分間で片づく。一錢、二錢に惜しみのかゝる人間が、——それほど勘定高い人間が、つまらぬところに、大きな損をしてゐるのであるから、實に頭が悪いと思ふ。

近時、日本精神の研究が喧しくなつて、「日本は言擧げせぬ國」だといはれる。言擧げせぬとは、餘りお喋りをしないといふことである。だから、申譯をいふのは、決して日本精神ではない。日本人であるならば、「ハイ」の一語で十分である。

この言葉は、小さい時から死ぬまで使ふ言葉である。「お前のやうな奴は妻でもない、歸れ!!」といふやうな言葉は、生涯にさう度

々ある筈がない。如何に経験の多い人でも、私は二百遍もいひましたといふ人はあるまい。それを思ふと、「ハイ」「ハイ」は生涯を貫く。小學校へ行つて、先生から「××さん」、「ハイ」である。家に居れば、親兄弟から呼ばれて「ハイ」である。

「ハイ〜」といふてゐる中に、何時の間にか大きくなつて來たのである。そのうちに、智慧もつき、賢くもなつて來たのである。この言葉の恩を忘れて智慧がつくと、「ハイ」の使ひ分けをするやうになる。「ハイ」を儉約して、言葉數の多い申譯をするやうになる。すなほさを失ふと、一人前の人間になつたやうに思ふ。肉體も智慧も、神様のお恵みを受けて生成發展してゐる中に、たゞ一つ、

すなほさだけが滅つてゆく。

なせ、これだけが生成發展の神様のお恵みの外にあるのだらうか。

心一つだけが我がの理であるからである。

一體、吾々にとつて、自分のものといふのは何一つとしてない。

吾々の日々の生命は、たゞ、大御稜威の大御業によるのである。平易にいへば、天皇陛下の御恩によるのである。そこに生きてゐる吾々である。私のも、といへば心だけである。

なせ、心だけが自分のものであるのか。

心に浮ぶものが、自分の通つて來たことだけであるからだ。

例へば、私は北極や南極へ旅行をした覚えがない。だから、北極

とはどんなところであるか、如何に考へても心に浮ばない。これが浮ばないとは残念、と目をむき瞋らせても、経験のない私の心からは遂に何ものも浮ばない。しかし、天理教本部はどんなところかと聞かれれば頭一杯に本部の様子が、まるで頭の中に寫眞でも藏つてあるやうに浮び上る。私は、本部を知り過ぎるほど知つてゐるからである。

心に浮ぶものも千差萬別である。

生成發展を望ませ給ふ天つ神のお心に叶ふやうなことしか浮ばな

い人もあれば、一から十までその反對のことばかり浮ぶ人もある。
一は徳のある人であり、一は徳のない人である。

徳のある人の心には、神様のお心に叶ふやうなことだけ浮ぶ。だから、それをそのまま言行に表せる。少しも嘘がない。全部がまことである。まことの生活は宇宙と則一體である。だから、その人の徳は愈々磨かれて光を増すのである。

大教會で會議がある。會長から「關、お前はかうしろ」と命令を受ける。私は「ハイ、有難うございます」とそのままを請けてしまふ。教會に歸つて役員に相談する。役員も何もいはない。「ハ

イ、有難うございます」といふ。今度は役員が信者の家を訪問する。そこでもまた、「ハイ、有難うございます」といって、いひ付けられたことが實にすらくと實現するのである。

「ハイ、ハイ、ハイ」で済んでしまふ。實に愉快でたまらない。

會長から命令された時、「私一存ではお返事いたしかねます。歸りまして一度役員と相談しましてから」といつて歸ると、今度は役員も亦曰く。「それは御尤もですが、歸りまして妻に相談を…」妻にいふと、「あなた、それは難しうございますよ、子供達にも相談しませんとね」といふ。その子供といふのが、三つ子であれば、これはもう、相談にならんといふ結果になつてゐる。

彼此相比べて、なるほどと領けるであらう。この世はまことである。まことに一體になつてをれば、如何なることも成就するのが當然であるし、まことの世にありながら、嘘で固めてしまへば、何も彼もが嘘になつてしまふのも當然である。

申譯なし

人の世を静観すると、或る時はまことになつてみたり、或る時はうそになつてみたり、まこととうそとの連続である。折角まことになつてゐるかと思ふと、一寸した都合でそれを潰してしまふ。うそばかりかと思ふと、思ひがけずまことをみせることもある。うその中から育つたまことである。何時までもまことであれかしと願つてゐる矢先から元のうそに崩れてしまふ。

磧の河原の石積みではないけれども、これでは、何時までしても元の空阿彌である。

たつた一言でもよい、まことの心から、まことの言葉を出した以上は、どこくまでも守り通したいと思ふ。どうせ私など、凡ゆることにまことではあり得ないのである。一つでも、二つでもよい。それを守り通し、生涯のまことにし通せれば、この上の幸せはないと思つてゐる。

或る時、妻が大阪へ出かけた。寒い日であつた。「今夜は寒いので、せうから、おそくとも九時までには歸ります」といつて出た。

夜になると北風が強くなつて、しん／＼と底冷えがした。一人の青年が、九時にお歸りになるのだからといつて、その寒さの中を驛

まで迎へに行つた。妻は九時になつても歸つて來ない。もう一ト電車もう一ト電車と待つてゐるうちに、とう／＼一時間半餘りも吹き曝しの驛で彼は待ち侘びた。

二人は十一時頃に教會に歸つて來た。私は迎へに出てくれた青年がさぞかし寒かつたらうと思つて、心に浮ぶがまゝに妻にいつた。

「なんだ遅いぢやないか、遅くなるなら電話をかけておき給へ。一時間半も二時間も、待たせておいて、可哀さうぢやないか——」

この時、私の目は三角に尖つてゐたことゝ思ふ。思つた通りの言葉であつたけれども、劍を含んでゐたことは事實である。

私の劍のある言葉に對して、彼女は不思議に神妙に出た。にこや

かに笑みを湛へつゝ、

「申譯ございませんでした」

といった。私は何だか拍子抜けの感じがした。このまゝ引き退つては何としても男の意地がたゞないやうに思つて、

「二時間近くも寒い目をした青年の身にもなつてやれ。青年は自發的に迎へに行つて、自發的に待つてゐたんだから徳を積んでゐる。

お前は青年を待たせたゞけ、恩を着たんだ。それを軽く思つてちや駄目だ」

繰り返し斬りつける劍の下に、然し彼女はなほすなほであつた。

「申譯ございませんでした」と何處までもやさしい。私はこららが

負けたと思つて、未練を残しながら劍をひいた。

その夜は考へた。果して妻は、本當に相済まぬと感じて、謝つたのであらうか。心ではそれほど済まないとは思はないでゐて、口癖のまゝ申譯ございませんと謝つたのではあるまいか。どうもさうらしく思へてならなかつた。

その翌る日。かういふ下心があつて、私はまた蒸し返した。私の言葉が終らないうちから、彼女の表情が變つてゐた。今度は私は笑ひながらであるのに彼女は恐ろしく引吊つた顔をした。

「くだいわね。夕べちやんと謝つたぢやありませんか。あたしは、月に一度か二度ぐらゐしか外出しませんけれども、あなたは殆ど

毎日ぢやありませんか。さうして何時だつて遅くなつてゐるくせに。自分のことを棚に上げて人を責めるのは、男らしくないわよ」

私は思はず大聲を擧げて笑つた。

「とう／＼化の皮を剥いだ。やつぱり己の思つた通りだ」

「何が化の皮なんです」

餘り面白さうに笑ふので、妻も笑ひの世界に少し引込まれて、表情を和げてゐる。

「化の皮とはね。お前夕べは神妙に謝つたね。あれは本當に申譯な
いと思つて謝つてゐたんかね。本心のまことの聲なら、今お前が目
をむいて怒つたのはありや一體どういふ譯なんだ。何といはれやう

と、何と責められやうと、本心から申譯なしと思つてゐるなら、最
後まで申譯なしと詫びてこそ、まことぢやないか。

「まことをうそにしてしまつたんだよ。うそになるやうなまことは、
まだ／＼本物ではなかつたんだね。折角まことになりかけてゐ
て、一寸つゝかれるとうそにしてしまふなど實に惜しいぢやない
か。人の一生はさう長うはない。短い一生に僕達は何ほどの徳を積
めやう。僕は多くを望まない。申譯ございませんといい言葉一つで
も、本當に生涯を通して、まことの心から出たまことの言葉にして
みたいと思ふんだよ……眞劍になれば僕達でも、二つや三つぐらゐ
は卒業できると思ふ。

彼女はさも可笑しさに笑つて、改めて、

「申譯ございませんでした」

といつた。

たとへ一點の光明のない闇でも、眞劍になつて見つめると、
自らものゝ姿が見えるものである。

何時までも一つところに停滞してゐるのは、眞劍にそれをやり遂
げようといふ氣概がないのである。眞劍な生活といふものは、いつ
も死線とすれ／＼といふ生活である。側で見る者はハラ／＼させら
れる。さうして、何も、そこまでしなくてもよからうものを、と思

はされる。

しかし、かういふ際どい生活をしてゐる人が却つて怪我をせず、
心配してゐる人の方が多く轉落するのであるから皮肉である。

私はあつい風呂を好むといふと、或る人はあなたの性格が激しい
からだといはれた。さういふ性格からであらうか、何をやつても眞
劍にならない人を見ると齒痒くてしかたがない。

「人生を一體何と心得てゐるのか。一體、君は、恩に感じてゐるの
か、ゐないのか。人にして恩を感じないやうな者は人間ではない。
極道息子を見給へ。親の言葉さへ通じないではないか。世間ではこ
れを馬耳東風といふ。その耳はもう人間の耳ではなく、馬の耳なん

だ。

「獸なら、眞劍にならなくても、それは當り前だ。まさか、君は獸の仲間入りをしてゐるのではあるまい。人間なら人間らしく眞劍になり給へ。君の生命が、一體、何によつて護られてゐるかといふことを思案して見給へ。たゞ、限りなき恩に生かされてゐることが理解出来るだらう。

「人生意氣に感ず、といふが、これは更に一步をすすめて考へると、恩に感ずるから、命を捨てゝも往くのである。常に恩に感じてゐる人の生活は眞劍である。ぐづ／＼してゐられないのである。ぐづ／＼してゐると恩が重なるばかりである。報恩の道は、たゞ夢

中に往くより行きやうがないのだ。

「だから僕は一時も自分の樂しみに費すのが惜しい。また、一時と雖も、いゝ加減なことをしてゐて、何時までもそのことから卒業でささないやうな生き方は辛抱出来ない。

大阪で布教してゐた頃。二階で掃除してゐると、下にゐた會長が、「關さん、あなたは箒に雑巾でも縛りつけて掃いてゐるんですか」といはれる。そこで試に、箒の先に雑巾をつけて掃いてみると、バサ／＼と大きな音がする。なる程と思つて、私は人知れず赤面をした。それから、自分は偉さうなことをいひながら、箒の使ひ

方一つが十分に出来てゐない。よし、これは一つ眞劍に研究してみようと思つた。

箒といふものは、五分つけようと思ふと七分つき、三分つけようと思つて五分はつく。疊の縁が、どんなに丈夫な布でも、朝晩に二度づゝ箒を當てるとすると、一年には相當な回数になる。若しそれが、やたらにゴシ／＼と當てられては、すり切れるのも當然である。いろ／＼とやつてゐるうちに、箒は、疊につくかつかぬかといふ心持ちで使ふこと、さうして、疊の目に添うて掃くこと。これを會得した。なるほど、さうしてみると、初めのやうに、バサ／＼といふ音がしない。静かであつて、しかも埃は綺麗に取れる。

三ヶ月ほど眞劍にやつて私は箒を卒業した。卒業すると、再び箒を持つことがなくなつた。女中奉公でもさうである。主婦の立場になつて、眞劍にやつてをれば、その人は忽ちに女中を卒業してお嫁入りをすることになる。

人生萬事において、眞劍は卒業の母である。

口と心

人々の日常の話を聞いてみると、よくもこれほど上手に嘘をいへたものかなと感心さされる。

この世はまことの世界である。少しも、うそがない。うそは唯、人間の口と心とにだけある。

春が来ればものゝ芽が出る。やがて花が咲く。青葉が繁る。このまゝ繁つてゆけば、この世界はまつ青になつてしまふのではないかと思へるほど威勢よく伸びる。それも、秋になると枯れてしまふ。麥を蒔けば麥が生える。胡瓜には茄子は出来ない。晴天がつけば

その後、雨が降る。夏は暑い、冬は寒い。寒い冬には雪が降る。昨日生まれたばかりのやうに思つてゐた赤ん坊が、何時の間にか歩き出し、その中に一人前になつてしまつてゐる。

よく観、よく考へると、この世界には微塵の嘘もない。全てが、まことである。眞の姿である。

「まあ奥様、いゝ羽織ですこと。とてもよくお似合ひですわ」

「いゝえ、それほどでもないません」

「お宅様は、何時も新しいものを着てをられます、本當に結構ですわね」

「まあ、それほどでもないのですよ」

こゝまではよい。一方は褒めそやし、一方は謙讓の美德を發揮する。實に、人情の美しい話し合ひである。これが、まことの心から出たまことの言葉なら、何をいふこともない。ところが決してこのまゝに片付かない。やがて、その人が歸ると、

「あの羽織、あれは安物よ、たいしたものぢやないわ」

と一人がいへば、忽ちに黄色い聲が、あちこちから湧き上つてくる。

「さうよ、この間デパートで見て來たわ、三圓ほどの安物——」

そこで私がいふ。

「なんだ、お前達は嘘をいつたのか」

「だつて、さういはなければ、御挨拶にならないではありませんか」

「それでは、口と心とは違つてる、駄目だ」

「それでは何といひませう。——奥様、これは一寸よくは見えませうけれども、安物ですわね。私もこの間デパートで見て買はうかと思ひましたが、止めたんですよ、と心に思つた通りいふのですか」

「さうだ」

「そんな失禮なこと——」

そこで私は笑ふ。

「口にそのまゝいへないやうな思ひ方をしないで、本當のことをいへる思ひ方をするのだ」

また或る時。

近所の子供と我が家の子供とが遊んでゐて、そのうちに、他所の子が窓硝子を破つた。

「またあの子が破つたの。しようのない子ね、もうこれで三度目ぢやありませんか。もう、あんな子と遊ぶんではないよ……」

母親はブリ／＼怒つて、我が子に當つてゐる。暫くすると、先方の母親がお詫びに来る。

「まあ、うちの子が硝子を破つたさうでして」

「いゝえ、誰かわからないのですよ、子供のことですもの」

「本當に済みません、お宅様はおとなですけれど、宅は至つてやんちやでして——」

「お互様ですわ」

これも口と心とは違ふ。そこで、私はまたいふ。

「そんな嘘をいはないで本當のことをいつたらどうですか」

「本當をいつたらお交き合ひが出来ません」

「だから、いへるやうなことを思ふんだ」

「どう思つたら宜しいでせう」

この時、何彼につけて理窟をいつてみたくてしようのない、青年が挑戦してきた。

「それでは、思ふた通りいふのが一番いゝのですね。——それで僕は決心しました。これから思ふた通りいひます」

かういつてから一寸思案してゐたが、「しかし、それでは困るなア」といつた。

「どうして困るのかね」

「僕は外交てなことは考へませんから、何でも勇敢にいひます。けれども……」

青年のいひ分はかうである。

毎日、子供を連れて来る人がある。その子供は、何時見ても餘り美しくはない。鼻をたれて、汚れた着物を着て、手足はまつ黒である。この子供をつかまへて、「お宅の坊ちゃんは可愛いですね」といふと、心と口とが違ふから、思つた通りをいへば、「お宅の坊やは、時何もきたないですね」といはねばならん。如何に氣を強くしても、度々顔を合せる人に、こればかりはいへないといふのである。だから、思ふた通りをいふにしても、何とか、うまいいひ方がないだらうかといふ。

「どんなに巧にいつても、心と違へば嘘になる。君は、いひ方に工夫してみようといふが、その工夫はいらないから、

思ひ方を變へてみるんだ。

思ひ方さへ變れば何でも堂々といへるぢやないか」

「汚い子供を見てどう思ふのですか」

「汚いことに目を付けるな。人の子供が、美しからうと汚からうと、君に何も關係がないぢやないか」

「何に目をつけるのです」

「大きくなつた——といふことに目をつければよい。大きくなつたと思つて、思つた通りに、お宅の坊やは大きくなりましたねといへば、口と心とが一緒に、それこそまことだ」

「なるほど——しかし、まだ都合が悪いですね」

「どうしてだ」

「だつて考へて下さい。その子供は、毎日やつて來るのですよ。多い日には朝と晩と二度も來ますよ。朝、大きくなりましたねといつて、晩も亦、大きくなりましたねといふのですか。これは、をかしいでせう」

「なに、をかしいことがあるものか。たとひ、一時間でも二時間でも見なかつたら、きつと大きくなつてゐるよ。生成發展は寸秒の休みもないのだ。神様の御守護は、一秒時と雖も絶えてゐないのだ——」

いさゝか苦しい答辯ではあつたが、眞理はたしかに、さうある可

き答である。

夫婦喧嘩の元も、うそから始る。

夫が夜更けても歸つて来ない。寒いことであらうと、眞實にさう思つてゐる。思つてゐた通りをいへばまことであるが、顔を見ると、急にうそをいひたくなる。意識していふのではない、無意識のうちに、良心の思ふことゝは、まるで逆な言葉が口をついて出てしまふ。

「あなた、この夜更けまで何處へいらつしやつてました」ときめつけてしまふ。これが喧嘩の始りである。

切口上といふものは、單に、感情の繋りだけを切るのではない。

それは、經濟も切り、子孫をも切る。

夫婦喧嘩の後味は實に辛々しい。仕事をしてゐても、ふと氣味なくなる。仕事が手につかなくなる。夕方になつても、男の體面上、おめくくと家に歸れんといつて外食する。妻は妻で氣分が悪いといつては女中や子供に當り散し、何もせずに疝癪をたてるばかりである。内と外とで、一日を無爲に遊んでしまふ。たとひ、いさゝかなりと雖も、これが家庭の經濟にひびを入れることは事實である。

影響はこれだけに止まらない。夫婦の悪い心使ひ——一般にいへば、たしかに思想が悪化する。さういふ中に育つ子供が、また親の

思想に染まるのである。

経済問題といひ、思想問題といふと、餘り大げさに聞えるかも知れないが、實は、その根本は、夫婦問題にあることは明かである。経済と思想との、この大問題解決のためにも、夫婦は、まことでなければならぬ。

私 一 人

彼は或る會社に勤めてゐる高級社員である。一日、浮かぬ顔をしてやつて來た。何か訴へたい。聞いて貰ひたいことがあるやうに見受けられたので、私は彼のために一時間ほど割愛することにした。

「大分、不平と不満とがたまつてゐるやうだね、よし、聞いてあげよう」

「先手を打たれては困ります。實際、今日は僕の愛社精神を聞いて頂きたいと思つて、來たのです。」

僕ほど會社を思ふてゐる者は、全社員の中に、もう一人と他にある

まいと思ひます。これは自惚れではありません。自信です。これはどの自信が持てるといふのも、結局は、會社の將來を心配してゐるからです。

第一に、會社の制度組織が面白くないと思ひます。私がいくら一生懸命にやらうと思つても、現在の組織では、本氣にそれをやり遂げようといふ氣持になれません。人間のことでですから、やればやつただけの甲斐がなければ勵みが出ません。うちの社では、どんなに眞剣にやつても、重役さんの目をくらまして、のらくらやつてゐても同じなんです。寧ろ、のらくら組の方が給料がよくて、社長の氣に入つてゐるのですから、心外です。

「眞剣にやつてみたいといふ精神の者がをるのに、その者に存分氣持よく働かせられないといふのは、組織制度の缺陷ではないのでせうか。ですから、どうしても、この際、有爲の社員が働かれるやうな道を講じなければならぬと思ひます。……ともかくも私は一人でもやらうと思ひましたが少々馬鹿らしくなつたのでやめました。社員にかういふ氣持を持たせることが、果して會社のためになりませうか。……」

彼は言々句々に力をこめた。一通りの説明が終ると、如何でせうかと、私の顔を見た。

「よくわかつた。君の愛社精神は立派なものだ。會社を思はない者よりは幾分ました。しかし、僕はこれから君をぼろくそに叱りつけるよ。それを承知で聞いてくれ給へ」

彼は、やゝ意外な顔をして、ゴクンとつばを呑み込んだ。

君も、天理教の信徒なら、教祖傳は知つてゐるだらう。知つてゐるだけで、その精神を自分のものにしてゐないと見えるね。論語讀みの論語知らずといふものだ。

教祖傳に、「私一人ぐらゐどんなに苦勞しても駄目なんだから、いゝ加減にしておかう」

といふやうなことがあるだらうか。私は、教祖傳を見て最も感激するのは「私一人が苦勞すれば……」といふお言葉である。

私一人が苦勞すればと仰有つて、あの窮乏と嘲笑の中を眞一文字に進まれたのである。私一人が苦勞すれば、この決意の前には、嘲笑も嘲笑と教祖様のお耳に聞えなかつたらうし、身を切るやうな窮乏も、窮乏ではなかつたと思はれる。だから教祖様は何時も明るい、何時も勇み切つてをられる。君のやうな泣き言は少しもない。一體、もうやりきれないとか、もう少し妻に理解があつたらとか、もう少し金があつたらとか——かういふ種類の不足や不満をいへる間は、その實はそれほど行詰つてをらない證據である。教祖様が或

る日、文句の多い女中に、醬油の一杯詰つた樽を轉ばせて、中味が一杯だと音がしないのでせうと仰有つたといふこともある。苦しいの、辛いといへるうちは、まだ辛苦の頂點に達してゐない。まだまだ餘裕のあることを示してゐるのだ。

先年僕は臍臟出血といふ病氣をした。その痛さはお話にならない。世間で、七轉八倒の苦しみといふが、僕の場合は、それ以上であつた。痛い！と一聲いつたきり、寸分も動けなかつた。そしてねとくの膏汗が出た。ものもいはれず、動きもならぬ痛さ、これが痛さの極點ではないか。

苦勞も、本式の苦勞になると、不足や不満はない筈である。君は

愛社精神に燃え立つてゐる。だから今日の會社の有様を默視するに忍びん。見ることに聞くこと、憂ひの種ならざるはないといふのであるが、僕からいへば、不足と不満の音が出るだけ、君の精神は充滿してゐないのだよ。まだ、それほど眞劍ぢやないのだよ。

本當に愛社の精神があるなら、

私一人でもやつてみるぞ

といふ氣概に立つてほしい。

何ぞいへば、自分の至らぬところ、自分の努力のおよばざるを棚に上げて、これを一に制度や組織の罪に轉じて恥としないのが當今の人々である。「我をして囊中に入らしめばすなはち穎脱せん」と

いつたのは、昔の支那人である。日本精神は、置くべきところに置いてもらはねば仕事が出来んといふやうな、功利主義ではない。身はたとひ、如何に下賤にあらうと、

等しくこれ 陛下の赤子

たるの面目に生きて、人はどうあらうと、私一人は 陛下の御恩に報いねばと努力するのが日本精神である。

自分に社長の椅子を與へねば會社を刷新出来ないといふやうな考へを捨てよ。

この間も新聞に出てゐた。大阪の或る小學校の訓導は三十有餘年一年生ばかり受持つて押し通し、授業の餘暇には子供達の家庭を訪

ふて、子供達が元氣よくしてゐるかどうか、見とゞけねば寝なかつたといふぢやないか。これなど、今日の教育界に、どれほど大きな響を與へたか知れぬと思ふ。その訓導は、自分に文部大臣の椅子を與へねば教育の刷新は出来ないと考へた譯ではない。

楠公を見よ。楠公は、自分に廟堂の權を——今日の言葉で平たくいへば、陸軍大臣の椅子を與へたならば國賊を亡ぼさうとはいはれなかつた。寧ろ、不利の見えすいてゐた湊川の戦を、命令のまゝに受けて、七生報國を誓はれたのではないか。

會社中で最も責任ある者は誰か。他なし、我自らなりと、かういつてもらひたい。かう行動してもらひたい。會社に憂ふべきことが

あつて、而もそれが容易に改らぬとすれば、それは自分の勤め方が足りないのだと、自らを責め、自らを苦しめて、人知れずに苦勞をするのだ。

君だけ一生懸命にやればよいのだ。人が君と同じやうに従つて来ようが来まいが、それはどちらでもよい。それは君の知つたことではない。どこまでも私一人であればよいのだ。幸にして、皆が皆、會社を背負ふものは自分なりと信するやうになつた時、會社はきつと榮える。

君だけがやつて、他が君に馴はないのを馬鹿々々しいと思つてはならぬ。君が、慘憺たる苦勞をし、その中に徳を積み、君の一言一

行がまことをもつて一貫すれば、神が他の人々をそのまゝにしておかぬ。

だから、飽くまでも、私一人がやりきるのである。私一人ぐらゐが、やつてもやらなくても同じなのではない。私一人がやらなくては、會社が保たないのだ——かういふ精神になつてもらひたい。

單に、一會社の問題に限らない。小は一家庭から、大は國家社會に至るまで、憂ふべき事柄のある時は、「私一人」を國家社會の柱石に任じて、人知れずに自らを責めるのだ。

僕は先程から幾度となく、人知れずにやれ、といつた。それは、自分はこゝまで盡し勤めてゐるのだといふことを人に見せるなとい

ふのである。表面はさり氣なく、しかし、心の中には、絶えず己れを苦しめてゆく、かういふ行き方をしてもらひたい。

或る教會の建築の挿話にかういふことがある。×氏はその役員としてよく勤めた。何分にも設置早々の事であつたので、第一に金がない。第二に人の手もない。×氏は兩方の苦勞を一人でひきうけてやつてゐた。

或る夜のこと、何時ものやうに、普請場に寝た。蒲團がないので、藁をかぶり、枕がないので、柱を枕とした。夜が更けるに従つて寒さが身にしみて来る。そこで、藁の上に材木を載せた。木であらうと藁であらうと、重くなれば氣分だけでも温かいだらうと思つたの

である。その時など、自分がかうして苦勞してゐるが、會長は一體どうしてゐるかと思つたのである。折角拵へた寢床を出て、會長の部屋をのぞいて見ると、母子三人が蚊帳一枚にくるまつて、寒夜を凌いでゐるではないか。×氏はこの光景を見て、戸の外から涙を流して詫びた。また、苦勞してゐるのは私一人だと思ふ高慢を神様にお詫びした。

さて、普請が完成した。その奉告祭には、平日には餘り顔も見せなかつた人々がやつて來た。お祭りが済んでから一同祝膳についた。大して力にもならなかつた人々が、大きな顔をして、盃を傾けてゐる。この光景を見て、×氏は、こゝで一言なかる可からずと思

つた。×氏は、膝を正して、

「さて、皆さん……」

と口を切ると、突然、後ろから×氏の口に袖を當て、塞ぐ人があ
る。誰かと思れば、會長である。會長はポロ／＼と涙をこぼ
し、それがふり仰ぐ×氏の顔にこぼれた。會長も無言である。×
氏も無言である。かくて、その場は無事、目出度く済んだ。
その後で、會長は×氏にいつた。

「×さん、あの場でいつてしまへば、折角の苦勞が元も子もなくな
りますよ——」

會長の一句、正に金的を射るといひたい。

儉 德 記

明治天皇陛下の御儉德を語る石黒子爵談の一節に、かう書かれて
ゐる。

……明治天皇陛下の御儉德については、様々の美談がある中に、
天皇崩御後、森林太郎氏が御所衛生のことを擔任して、御座所の後
片付けをしたので、自分は森氏に依頼して、御學問所の欄間の紙と
襖の腰張とを少々頂戴したのである。頂戴というても、固より伺ひ
出た譯ではなく、唯お取り捨てになるべき廢物を、係の者より手に
入れたままであつた。

聞くところによると、御座所の欄間は、皇居御造營後たゞ一度御張替へになつたのみだといふことで、年経るまゝに眞黒く煤けてゐるので、係の者より時々張替へのことを伺ひ出づれば、陛下は何時も、それにはおよばぬとのみ仰せられて、長年、御張替へなかつたのであるさうだ。

扱て大正二年には自分も古稀になつたので、亡父が出張中に、自分の誕生した福島縣伊達郡柳川村に罷り越し、いさゝか懐舊の情を慰めた序に、土地の父老を集めて一場の講話を試みた。その講話前において、同村の小學校を訪ひたる歸途、この村中で一番貧乏なる百姓家といふのを尋ねて、その障子の一小間を切り抜き、張替

料として二十錢銀貨を與へて持ち歸り、この百姓家の障子紙と、豫て持參した彼の御學問所のとを比較するに、百姓家の方が遙かに綺麗であつたから、今更ながら恐れ入り、講話中この二つの紙を取り出してこれを來會の父老に示しつゝ、陛下が世界第一御儉徳の帝に在すことを物語り、獨逸では帝室費として、一年に一千八百萬圓を計上され、その他歐洲諸國の君主は、皆巨額の帝宮費を消費してゐるのに、我が帝宮費の年額は僅々四百萬圓である。而して、國民が水火難災厄の場合に、恩賜せらるゝ金額は、却つて歐洲の帝宮に勝つてゐるのは、畢竟、陛下が親躬ら儉徳を守らせ給ふお蔭であるから、國民は肝に銘じてその御恩徳を忘れてはならぬと述べ

たところが、父老の中には聲を放つて泣き出した者もあつた。……

(高橋桐庵著「掃のあと」より)

萬人に絶したことゝいふものは、萬人に絶した有徳者でなければなし難い。

「こんな着物を着てゆけない、こんな下駄は履けない、こんな見すぼらしい家は駄目だ……」

といふことは、いひ變へると、

「それでは人に笑はれるから」

「それでは自分の値打が下るから」

といふことになる。

徳のない者は、人の毀譽褒貶に常におびやかされてゐる。自分自らの力で生きてゆくといふよりは、人の言葉に練られて生きてゐるのである。結局、徳のない者は、斷じて行ふといふ、眞の勇氣を持たない。

人の前で誤つて、砂糖をこぼしたとする。

「おい雑巾を持って来い」といつて、それを拭き取らせてしまふ。

そして、砂糖の一粒ぐらゐが何だ、といふ顔をして見せる。この人は、ものゝ恩がわからないのである。ものゝ恩がわからないほどの

人間であるから、徳のない人間であることはいふもおよばない。徳

がないから、せめて埃にまみれてゐない砂糖だけでも、丹念に拾ひ寄せる勇氣がないのである。

教祖様は、葉の葉一枚も粗末にしてくれるなど教へて下さつた。たとひ菜の葉一枚にしろ、それを育て下さつた、神恩に感じ、感恩の感激に燃えてをれば、一莖の葉と雖も踏みにぢられるものではない。

私の恩師、中川よし會長が丹波から東京へ布教に出られた當初のこと、十六日間餘りも泊る家がなくて、日々歩きづめに歩いた。人家の軒に佇めば臙腫俵夫が拐しに来るし、公園のベンチに憩へ

ば巡査に追ひ立てられ、足を休めるところがなうて歩きに歩いた。宿がないくらゐであつたから、三度の食物が十分にある筈はない。人々は、いぶかつて、水道の水を乞ふても快よく與へてはくれぬ。時たま、親切な人から氣持よく「さあ、どうぞ」といふて願けてもらふ水だけの日々である。

水ばかりの日々。——その中に、乳が出なくなつた。強く絞ると水のやうな汁が出るばかりである。背の子供も、日々に瘦せ衰へて、飢じさに、絹を裂くやうな聲で泣く。

或る夜、さゝやかな神社の境内に入り、

「子供は泣きますがお乳が出ません。せめて、この子を母親の肌

抱いてやりたいと思ひますから、暫くこゝをお貸し下さいませ」
とお願ひして、階の下に腰を下した。さうして、背の子を懐
の中に抱きしめて、また神様に願つた。

「私も母親でございます。たゞ今は、さうでもございませませんが、も
しも今後の子供の愛にひかれて、助け一條の精神が鈍るやうなこと
があるとしてもすれば、まことに申譯のない次第でございます。神様
ならば、私の精神がこの先、どう變るかぐらるはお判りでございま
せう。若しも、子供の愛にひかされるやうでございませすれば、どう
か今のうちに、この子をお引取り下さいませ……」
そして、我が肌を抱きしめる子には、

「お前はまだ頑是ない子供であるけれども、天つ神様の御命のまゝ
に人助け出来るとは、何といふ幸福者だらう。五十年、六十年生き
永らへても何も出来ない人さへある。お前は、たとひ、このまゝ出
直していつても、助け一條のために斃れてゆくのだから結構ぢやな
いか……」

と、無心の子供にいひ聞かすのであつた。

やがて、東が、ほのくくと白み初めた。會長はまた子供を背に
こゝを出かけると、綺麗な小川が流れてゐた。それを手に拵つて、
神様にお供へし、母子が一口づつ、朝の食事であつた。

この時の話である。私は幾度となく會長から聞かされた。その

度に感激を新たにしたものであるが――。

「關さん、その時にね、ふと見ると、其處に小さな花が咲いてゐました。私は、その花が、勿體のうて、踏めなかつたよ」

道の邊の名もなき小花一つ、踏み付けに出来なかつたといふ會長――私はこれについて、も早や説明の文字を列べるに堪へない。「さうだらう」と思ふだけで胸が一杯になつてくる。

たゞ、會長のやうに恩に感じて、精神が宇宙と則一體になつてゐる時には、人の慈悲は山川草木虫けらにも及ぶものだといふことがわかる。

恩がわかるから、勿體ないと拜む精神になる。勿體ないから粗末にしない。だから、いよく徳を積む。徳を積む道に精進するか、益々恩がわかるやうになる。

修徳の道と報恩の道、私は、これは表裏一體であると信ずる。

徳を積む

永らく、外務省の門衛を勤めた人の話に、

「内閣が變つた度に、今度の内閣はどのくらゐ續くか、見當で略判ります。かういへば何ですが、この門を入る時に、私にまでも挨拶してゆくほどの閣僚の多い内閣は長續きをするやうです」

といふ。

門衛に會釋をするといふのは、門衛など眼中にないのとは、その「こゝろ」の置きどころが違ふのである。身は國務大臣といふ人臣の最高にあり、しかも、心は一門衛の端に至るまでおく。有徳の士の態度である。

徳といふものは、心を人と對等の位置においてをつては修められない。心を常に人よりも低くおくのである。低い心は、低くおかうと努力しておかれるものではない。恩がわかつた時に、努めなくとも、自ら心は低くなるからである。

東本の初代会長、中川與志先生は、道を歩くときは、何時も頭を下げてをられた。見てゐて、餘り様子が好くないので、どうして、そのやうな恰好をするのですかと尋ねると、

「あちらからも、こちらからも頭を下げて下さる人があるので、若

しも私が氣付かないで御挨拶もせずに通り過ぎては失禮になりますから、どなたが、どこから挨拶して下さい下さつても御無禮にならないやうにね」

といはれた。

心が低いといへば、會長は常に信徒の端々に至るまで心を配つた。東京から團體で本部に參拜に來た時などは、皆が寢靜つてから詰所の部屋々々を見廻つて、ふとんを跳ねてゐる人があれば風邪をひかぬやうにと着せ掛けてやり、一巡してから自分は終ひ風呂に入つて寢まれたものである。これは、低い心といふよりは、親心といつた方が適切である。しかし、親心とは、やはり低い心である。

立場からいへば、親は子よりも高い。たゞ、心は、子供より低いのである。それでなければ、子供の世話が出来よう道理がない。

「子供と一緒に遊ぶなんて、そんな馬鹿氣たことが出来ますか」

「おむつの洗濯など、あたしには、そんな穢らしいことは出来ませ
ん」

こんなことをいふてゐては子育ては出来ぬ。

「百人の頭に立つ者は心を百人の下におけ」

といはれる。

百人の頭に立つ者は、姿からいへば百人の最上にある。位置だけ

で、百人の人を統率してゆかうとするのは、恰も、鰻の頭だけを握つてゐるやうなものである。一方は動かないやうに出来るが、しつぽは、どうにもならない。頭と尾と、兩端を握つた時に、初めて一匹の鰻を自由に出来るのである。

身は百人の上にあつて、心を百人の下におくといふのは、則ち、百人の上と下とを握ることになる。これで、治るのである。

或る教會に、祭典役員と呼ばれる人があつた。それは、月次祭の日に、時間ぎりぎりに出て来て、お勤めを済ますと、さつさと歸つて行くからである。

「あなたは結構なお身分ですね。お祭りの前後の用事は人まかせ

で、偉さうな顔の出来るところだけを勤めるんですね」

かういふと、

「いや、さうではありません。私は非常に忙しいのです。教會の雑用をしてゐるより、私の忙しい用事をしてゐた方が、ずっと大きな御役に立つと信じてゐますので、お勤めだけに出さして頂くのです」

「だから結構なお身分だといふのですよ。私が代つて、正直にあなたの氣持を申しませう。あなたは、自分の好きなことだけをして、嫌なことをしないのでせう。上級教會で、まご／＼してゐると、會長に文句をいはれる。好ましからぬお叱りを受ける。したくな

い命令を受ける。——あなたは、こゝから態よく逃げ出してゐるの
でせう——」

「少々手酷しいやうですが、まあ、さういふことです。恐れ入りま
した」

「一體、あなたは、みちを通つてゐるのですか」

「勿論、通つてゐる積りです。自分では、これで精一杯です」

「自分の好きなことだけして通るみちなど、駄目ですよ。自分勝手
のみちなど、まだくあなたに通れさうもない。あなたは、本道を
通つてゐるつもりでせうが、それは横道ですわね」

「一生懸命にお助けもしてゐますし、——少しも横道に外れてゐる

とは思ひません」

「それでお助けはどうです。神様のお恵みを頂いてゐますか」

「それが、その……もう一つどうも思ふやうにまゐりません」

「だから私は横道だといふんですよ。今のあなたにとつては、上級
の會長のいはれるまゝに通るのが本道です。本道は横道よりも峻
しくて苦しい筈です。あなたの様子を見てゐると、一向、苦しさう
に見えない」

「もう信心して十年になります。さう何時までも苦しんでゐては神
様に申譯ないと思ひます」

「その心掛けは結構です。しかし、お助けが出来てゐないで、神様

に申譯が立ちますか。一體、あなたは、その十年間、何をして來たのです、何を目標に歩いて來たのです」

「……」

「あなたは、この十年間に、少しでも徳を積めましたか。徳を積まうとするには、好きな自分勝手な道を通つてゐては積めませんね。一から十まで、會長様の仰有る通りにやることです。會長様は決して、あなたの好きなことを命令されない。仰有ること一つくが、嫌でくたまらんことばかりです」

「本當にさうです。一度だつて、私の好きなことを仰有つては下さいません」

「さあ、そこだ。會長様の仰有る嫌なことゝいふのが、あなたには一番よい薬なんだ。好きな道を通つてをれば、何時までたつても、好きがとれない。あなたの心を曇らしてゐるのは、その好きな我が身勝手な虫だ。したい放題にしてゐると、その虫に餌を與へてゐるやうなもので、虫は肥るばかり、心は曇るばかりです。會長の嫌な命令を受けて好きを封じこんでしまふと、つまり、その虫に榮養を與へないと同様である。何日も何月も、飯を食さなければ、その虫は死んでしまふ。そこで、あなたは、心の掃除が出来るといふ譯でせう」

「伺つてゐると、どうもうまい話ですね」

「好きといふ虫が死んで、後に残るものは、會長の言葉と、それをやり遂げた理だけである。これがあなたの徳なんですよ。徳を積まずに、人助けとは、餘りに虫がよすぎますね。頭のよい貴方が、これくらゐのことが、判つてゐなかつたとは、いさゝか意外です」
「恐れ入りました。一つ眞劍に徳を積みませう」
「やつて下さいよ。私は、あなた一人のためにいふのではありませぬ。あなた一人がさうなつて下されば、お國にどれだけの御恩報じになるか知れない……」

神 經 戰

「君は生きてゐるのか死んでゐるのか」

「勿論、生きてゐます。現に、先生とお話をしてゐるではありませんか」

「だつて、君のいふことを聞いてゐると、君は自殺してゐるせ」

「さうでせうか」

「さうさ。こゝに、千切の谷にかけられた丸木橋がある。それを渡らうとする途端にふと、恐ろしくなる。君はこゝまでは平氣で來たんだ。君が歩いてゐるのか、神様に歩かせて貰つてゐるのか、それ

さへもわからないほど、神と君とは一體になつて歩いて來たんだ。ところが、丸木橋に一足かけた瞬間に、君は、身びいきの考へを起した。

落ちたら死ぬ。

かう思つたんだ。渡らない前から君は死んでしまつた。その上に、次から次へと、空想するんだね。

谷底に落ちて死んでも、誰一人として現場を見てゐないから、私といふ人間が何處で死んだのかわからない。家族は血眼になつて探すだらう。しかし空しくあきらめるに違ひない。私は谷底で朽ち果てて、お葬式は遺品か何かを靈代にして營まれるだらう……」

「私はそんなに案じてはゐやしません。たゞちよつと、案じてゐるだけなんです」

「どつちにしても同じことだ。僕はこれを、案じに案じの理がまはるといふてゐるんだが、一つ案じだすと、案じといふやつは、限りなく擴がるものだ。利子のつくのは、お金だけと思つてゐると間違ひだよ。案じ心にも利子がつく。

今、此處で僕と君とが練り合つてゐるが、もう一時間ほどすると、話が終つて、君は歸つて行く。僕も此處を引上げる。さうすると、形の上だけで見れば、此處に何も残らない。しかし、三月十日の午後三時十分頃から一時間ほど君と話をしたといふ事實を消してしま

ふ譯には參らぬ。これが理だ。この理が所在不明で、たゞこの空間にぶら／＼してゐるかといふと、決してさうではない。この理は、僕と君の心にくつ／＼いてゐる。心に、くつ／＼とこれが、いんねんといはれる。僕と君とが練り合つて、君が満足して歸つた、といふ、いんねんは何時までも消えない。だから、他日また會ふと、君は、先日は有難うございましたといつて御禮をいふ。僕も、とゞかんとことでしたとお詫びする。

「しかし、僕と君とが此處で喧嘩したとしよう。君は恨みを持つて歸る。今度もし電車の中などで會ふと、君は、あいつにやられたんだ、いま／＼しい奴だと憎悪を燃す。何かの拍子で僕が君の足を踏

みつけたら、もう君は承知しない。こゝで喧嘩になつてしまふ。つまり、いんねんに、いんねんを重ねるんだ。心の理は、善いことにしろ、悪いことにしろ、必ず利子がついてまはつてゐるといふことを思案せなければならん」

「本當に君は神様を信じてゐるのだからか」

「信じてをります。信じてをればこそ、かうして布教もしてゐるのです。そして、このやうな悩みもあるのです」

「神様を信じてゐて、案じ心が出るのはをかしいね。僕は、案じ心が出る時は、神様を信じてゐない時だと思ふね。だから、僕は案じ

心など使つてゐるやつは、生意氣もはなはだしいと思つてる」
「そんなことがありますか。私は、何とか自分自身でことを治めようとするはこそ、一生懸命になつてゐるんです。それが何故、生意氣なのです」

「その考へ方が生意氣だ、一體、君は誰に生されてゐるんだ」

「勿論、神様です。それくらゐのことはよく判つてゐます」

「本當に判つてゐるのか」

「本當です」

「その本當が怪しい。本當なら決して案じ心などの出る筈がない。案じ心を持つて寝ると悪夢を見るだらう。我が身思案があるから、

安らかに眠れないのだね。一日の勤めを果して思ひ残すことなく寝るときには、食ふことも着ることも何も考へてをらない。身體ごと神様におまかせして寝る。人間に、この時ほど美しい姿はない。一切の邪氣から放れて、神様に抱かれきつてゐる。

君は、神様を信じてゐるといふが、僕からいへば、君と神様とは對立してゐて、一つにはなつてをらない。さういふ立場で、君は神様を信じ、神様に生されてゐることを知つてゐるのだ——」

「神の信じ方に、まだその奥があるのですか」

「君は今、僕と話してゐる。眞剣に話してゐる。それで君は子供のことを案じてゐるか」

「少しも考へてをりません」

「親が仕事に熱中してゐる時は、親と子とが一つになつてゐるんだね」

「さうですね、僕は今頃、子供がどうしてゐるか、泣いてゐるか知らん。遊んでゐるか知らん。そんなことを思ひもしてゐません」

「それほど、君と子供とは一つになつてゐるんだ。ところが若し、表に自動車の警笛が鳴り響き、子供の聲がすると、君は飛び立つだらう。その瞬間に、君と子供とは對立の關係に歸つてゐるんだ」

君は今、一つの事情、といふやつのために、神様と對立してゐる。少しも一つになつてゐない。そこから案じ心が出て来る。神様から

放れた人間なんて、これほど弱いものはないからね」

「さうすると、この事情のある限り、神様と一つになる譯には參りませんね」

「君の日々に、感謝といふものがあるだらうか。結構で有難くて、

お禮の申しようもないといふ感激があるだらうか」

「それがあるくらゐなら、事情などで悩みはしません」

「事情があるから神様と一體になれるのだから、感謝の湧くやうな心を造つてみたらどうだらう。金があつて、御馳走があつて、何の心配もないからといつて感謝が起るものではない。無一物の生活の中にも感謝がある。教祖様の生活を見ろ。水ばかりのお暮しの中

でさへも「わたしは、水を呑めば水の味がする。山ほどの御馳走を積まれても味へない。食べられない人のことを思ふと、勿體ない、有難い」と仰有つてゐるではないか。

生かされてゐる恩を思へば、感謝と感激とは自ら湧いて来る。或る時、僕は教會の門をくぐる時に、思はず頭を下げた。私のやうな者が、こゝにおいて頂けるのだと思ふと、たゞ有難かつた。その時は、下駄を脱ぐと、下駄にも御禮をいひたくなつた。さうすると、不思議に見るもの聞くもの、有難いものばかりだ。お歸りなさいと迎へてくれる人々、揃へられてゐるスリツバ、火のある火鉢、温かいお茶、心盡しの食卓、それを準備してくれた人々の温かい

心 僕一人を生すために、これほどいろ／＼な物が奉仕してくれてゐるかと思ふと、君、實に勿體ないぢやないか、有難いぢやないか。これでも、感謝と感激とがないといへるだらうか」

「有難いことですな」

「有難いね、有難いことばかりが目につくと、不足や不満は何處かへ影をひそめてしまふよ。慾がなくなるんだな」

「君はさつきから事情々々というてゐるが、結局は金がほしいのだらう」

「金があれば解決することですから、まあさうです」

「その欲しいといふやつを捨てられないだらうか」

「金があれば、捨てるも捨てないもありません」

「さうだらう。金が欲しいといふのは、ないから欲しいのだね」

「あたりまへです」

「たしかに君はお金がない、だから欲しい。しかし、もう一步すゝめて考へると、君の心に金がないのだ。だから、心のやつ、金がほしい金がほしいと訴へる」

「それに違ひありません。私一人ではなく、皆が皆さうでせう。さうして、どなたに聞いても、求めるな、求めるなと仰有います。然し、さう聞いただけでは満足出来ません。求めなくても生きてゆけ

る世界を明示してもらはねば安心が出来ないではありませんか」

「君は金がないのだね」

「えゝ、ありません」

「それで、生きてゆけないのか、ゆけるのか、どつちなんだ」

「ゆけないと思ひます」

「現在はどうかんだ」

「……」

「生きてゐるぢやないか。それでも、君は金に生されてゐるといふのか」

「さつきも申しました。神様に生されてゐます」

「よくわかつてゐるね。それで、いゝぢやないか」

「さう、簡単なものではありません」

「簡単なことを複雑にして、君は神を失つてゐるんだ。生きてゐる。生されてゐる。このまゝでいゝぢやないか。その中にも、感謝と感激の種は無盡蔵にあるのではないか。金なんか、ほしいと思ふな、金いらん、金いらんと思ひ給へ、一生懸命に思ひ給へ。その中に、君の心の恰好が、金のやうなものは欲しくないといふ姿になつてくる」

「さうでせうか」

「疑はずに、一度やつてみ給へ」

「どうも頼りない話ですな」

「迷はずにやり給へ。迷ひといふやつは、心に二つのものが對立してゐる時に起る。今の君だつてさうだ。

金が欲しいから金儲けしようかしら。

それはいけない、お助けに夢中になれ。

君の心にはこの二つが立合つてゐる。どちらにしようかと迷つてゐる。君は、これを悩みだといふ。馬鹿氣た悩みさ。

人間といふやつはね、どちらにしようかと思つたが最後だ。きつと都合のよい方に決めてしまふ。決して都合の悪い方には決定しない。都合のよい方にきめて、それから理窟をこしらへるのだ。或る

本にかう書いてあつた。

「人間は善悪いづれにすべきやと考へたが最後、九分九厘まで悪魔の術策に陥つたも同然である。悪魔はかういふ人間を好い餌にする。悪魔の最も困る人間は、神の聲をすなほに聞いて、ハイと立ち上る人間だ」

本當だね、僕も同感だ。

君も、上級の會長様の言葉どほりに、助け一條に勇ましく立ち上り給へ。ハイと云つて、立ち上り給へ。右に行くか左に往くか判らん。判らんでもよい。眞直に行き給へ。人は君を見たら、
「あいつ、あんなことをして氣でも狂つたのか」

といはれるまでやり給へ。それは死線とすれ／＼の歩みだ。ところが、この歩みが一番たしかだよ。ハラ／＼してゐる者が案外につまづいて、されてゐる方は、シャンとしてゐるんだからね。見るからに危い丸木橋。しかし、渡つてみればこれ坦々たる街路なんだ」

近代戦は、武力戦の外に、経済戦がある。思想戦がある。宣傳戦がある。宣傳戦といふのは、敵國の神経をとがらせる戦法である。「今に×國は食糧難に參るにきまつてゐる。現にもう國民は悲鳴を擧げた。経済的にも行詰つて、後半年も保つまい……」

と、敵國の人心を脅かすのである。

またこれと反對に、自國の強味を吹聴する。

「超弩級戰艦が何隻、飛行機は晝夜兼行でどしどし出て来る。素晴らしい威力の爆弾が出来た……」

と、敵國を威嚇する。

この手で、神経を弱められて、案じ心が出る國が負けるのである。だから、私はこれを、神経戦と名付けてゐる。

神経戦は、一國對一國のみにあるのではない。吾々の人生にも、神経戦は常に繰り擧げられてゐる。案じたら負けだ。それは、神をつゝ放してゐるからである。

常に神と共にあれ。そこには斷じて案じ心がない。これほど安らかな、これほど強い生き方はない。

涙と微笑

或る年の婦人會總會に、東本の初代會長が一席の話をすることになった。「助けのおよしさんの話がある」といふので、聴衆は非常な期待をもつてこの日を待つてゐた。

さてその日が来た。順番が廻つて、會長は演壇に立つた。萬衆たゞ耳をそばだてた。あの人の口から何が出るのかと、かたづを呑んだ。

「御教祖様は……」

美しい聲がたつたこの一語で杜絶えてしまつた。遂にその後がつ

づかない。見れば、會長の兩眸から涙が流れてゐた。

聴衆も亦、この人と共に涙を流した。そして、幾萬言の話を聴いたよりも、もつとく力強く、教祖を偲び、教祖の恩に感到した。

私の布教時代のこと、或るお助けに十三日の絶食をした。徳のない私は、そのために、見るかげもないほどやつれ且つ蒼ざめた。

その時、會長が大阪へ來られたので、私は挨拶をした。

「關さん、どうしたのですか」

と聞かれたので、側にゐた人が、その理由を説明した。見ると、會長はポロ／＼と涙をこぼしてゐた。私は、有難くて勿體なくて

しかたがなかつた。空腹も疲れも、一時に飛んでしまった。親の涙、無言の涙が、譯もなく、有難く、身體中が温かくなつてしまつた。さうして、その後で、

「わたしにも覚えがあります。神様のお造りになつたこの身體を、そんな無茶をしては申譯ありません。私が神様にお詫びさして貰ひますから、今日から御飯を頂いて下さい」

と、一言。

この涙とこの一言。

親心の温かさは、今日なほ、私の血の中に残つてゐる。

良寛は越後の人である。私も越後である。

同郷の師といふのであらうか。私は、良寛が好きだ。

良寛が或る時、放蕩息子の説諭を頼まれてその家に泊り込ん

だ。親達は、今日はお説教があるか、明日はあるかと待ち侘びてゐ

たが、良寛は一言も語らなかつた。

三日目に、良寛は歸るといつた。親達は意外に思つた。良寛

は素知らぬ顔をして旅の仕度を始めた。そして、息子を呼べといつ

た。親達は、これからお説教があるのだと思つて、急いで息子を呼

んだ。良寛は草鞋の紐を結んでくれといつた。息子は、生意氣な

坊主と思ひながら、しぶく、良寛の足許にかぐみ込んだ。すると

彼の手かれの手に、ポタリと涙なみだが落ちた。見ると良寛りやうくわんの目めには一ぱい涙なみだがたゞへられてゐた。

良寛りやうくわんはそのまゝ、すた／＼とその家うちを出て行つた。息子むすこは何時いつまでも／＼この僧そうの後姿うしろすがたを見送つてゐた。そして、彼かれの放蕩ほうたうは、ふつ／＼と止んだ。

釋迦しやかはその依鉢いへつを繼ぐべき者ものを弟子でしの中から選えらぼうとした。

弟子達でしたちは、吾われこそはと意氣いき込んで、釋迦しやかの前に滔々たうたうと悟さつりを述べた。しかし、この面々めんめんは皆落第みならくだいした。衣鉢いへつは迦葉尊者かえふそんじやに渡わたされた。迦葉尊者かえふそんじやは他の弟子でしのやうに多くを語かたらず、たゞ、ニコリと微ほ

笑わらんだだけであるといはれる。

彼かれが信心しんじんに入るまでは、非常ひじやうな頑固者ぐんこものであつた。彼の頑固ぐんこさに、妻つまも泣なき人も泣ないた。環くわん境きやうの人々ひとを泣なかすだけ泣なかせて、彼かれは入い信しんした。

先まづ、心こころを落おさねばといふので、教けう會わいの下足番そくはんをした。お茶汲ちやくみをした。それを一生懸命しやうけんめいにやつた。その姿すがたには、信しん仰かう前ぜんの頑固ぐんこさは微塵みじんもなかつた。實じつに、鮮あざかな轉身てんしんぶりであつた。

拜殿勤はいでんづとめは、もうこれくらゐで良よからうと會くわい長ちやうの許ゆるしを得て、初はじめて布教ふけうに出た。一番最初いちばんさいしょに或ある俵屋くわまやに匂におひがかゝつた。

俵屋の内儀さんが寢込んでしまつたので、亭主は働きに出られない。仕方がないので、家にゐて草鞋を編んでやうやく暮しをたてゝゐた。

亭主は何時も入口の土間で仕事をしてゐた。彼は、その入口に佇つて、亭主に聲をかけるのだが、亭主はてんで相手にしない。振り向きもしない。草鞋あむ手を止めないで、

「天理教はまつびら御免蒙るよ」

といふだけである。彼はとりつく島がないので、亭主の背中に頭を下げて歸るのである。道々、彼は思つた。

「俺といふ男は、よつほど頑固だつたんだ。あの俵屋も相當なもの

だが、あの背中に挨拶しなければならん俺は、もつとく頑固な奴だつたと見える。あの亭主が、話を聞いてくれぬ間は、俺はまだまださんげしなければならん——亭主の聞いてくれないのは、さんげの足りない證據だ」

降つても照つても彼は通つた。亭主は相變らず後ろを向いたまゝであつた。始めの間こそ「天理教はごめんだよ」とでも、ものをいふてくれてゐたが、終ひには、それさへいはなくなつた。

「今日は。おかみさんは如何ですか。信心して下さればきつと助かりますのに——」

彼はこれだけいつて、背中に頭を下げて歸るのだ。かうして、一

年半の間、毎日、足を運んだ。

さうして或る日。この日も、亭主の背中にものをいひ、黙つてゐる亭主に頭を下げながら、

「もういゝ加減に我を折つて信心して下されば助かるのになア。まだ聞いてもらへないとところを見ると、俺の頑固のさんげかな。もうさんげが足りてゐると思つてゐるが、まだ／＼足りないのかな」といつた。

その時、一年間も背を向けたまゝだつた亭主が、ぱつと後ろを向いて、彼の前に土下坐して謝つた。

「申譯ない。申譯ない。もう半年も前から實は參つてゐた。今日は

謝らうか。今日は謝らうかと思ひつゝ、その時がなかつた。長い間本當に濟まないことをした。どうか勘辨してくれ」

「いや／＼、貴方が悪いのではない。私は頑固だつたんだ。さあ、

お内儀さんにお授けをさして貰はう」

お内儀さんこそ、長い間、二人の頑固に挿まれて、いゝ迷惑をしたといふものだ。

聲樂の大家、シヤリヤピンといふ人が先年日本に來た時、すばらしい讃辭を浴びた。

しかし彼はかういつた。

「私をほめて下さるのは有難いが、聲は楽器です。魂の奥からのものを、聲といふ楽器を通じて出すだけです」

さすがに、名人と謳はれる人の言葉であると領かされる。

涙も微笑も聲も、魂の奥のものを表すだけである。魂の内容が、空であれば、幾干言を吐いても人の魂に入らぬ。況んや夫婦喧嘩の涙などで、人の心を洗ふ譯には参らぬ。

魂が、宇宙に充滿すれば、身はたとひ閑雲に高臥するとも、よく天下を支配する。

さういふ魂からほとぼり出る、

一ト聲

一滴の涙

微笑

にして、よく人を生すのである。

顔

芝居と講談と、どちらが面白いかといふ問に答へて、高橋帯庵氏はかう答へてゐる。

「芝居では主役は一人である。この一人が名優であつて、名優の演技は眼にも楽しめるかも知れないが、後の登場人物は名も通らない端々役者が勤めるので、見おとりのするのは當然である。ところが講談はさうでない。話に出て来る人物を全部一人がやつてしまふのであるから、出て来る人物が演者の表情と口とで全部生動する。僕はこの點において、名人の講談の方を面白いとする……」

講談師の顔を見てゐるのは聴衆である。演者自身は、感によつて、多分かういふ顔をしてゐるだらうと想像ぐらゐは出来るかも知れないが、本當の自分の顔を見る譯にはいかぬ。演者の顔を占領するのは、聴衆である。

この逆もいへる。

聴衆は演者の顔を見て、泣いたり笑つたり、浮いたり沈んだりするが、さて、自分で自分の顔を見られない。幾百といふ聴衆の表情をたゞ一人で占領してゐるのは演者である。

一體、「私の顔」といふのがあつたらうか。よく、「それでは私の顔がたぐない」とか、「それでは私の顔が丸潰れ」だとかいふ。私の顔といふのは、私の肉體の一部であるがために、所有權を強調するのであるが、若し假りに、この世に誰も居なくなつて自分一人となつたとすれば、その時でもなほ、私の顔を強調できようか。自分以外に、この顔を見てくれる人があるから、私の顔がものをいふのである。

であつてみれば、「私の顔」はありやうがない。

顔のありやうとは、

私の顔は あなたの顔

あなたの顔は 私の顔
である。

夫婦が差し向ふて坐つてゐる。にこやかに坐つてゐるのではなうて、苦々しく坐つてゐるのである。夫が妻の顔を見る。妻は、ふぐのやうにふくれてゐる。その顔を見てゐるといよく苦々しくなるばかりである。黙つてをれなくなつて、

「その顔は一體何だ、鏡でも見ろ」

と、どなりつける。しかし、妻の顔は一向に晴れさうにない。うらめしさうな目を上げて、ますます險惡な表情になる。

かういふ時、夫は先づ自分の顔を鏡に映してみることである。自分の顔も、妻に負けないくらゐ、とげ／＼しいに違ひない。

私の顔はあなたの顔だ。

貴方の顔は私の顔だ。

だから、妻のふくれ顔は、實は夫の顔なのだ。毎度々々、鏡を出して見るまでもなく、妻の顔に自分の顔がそのまゝ映し出されてゐるのである。

一體、どちらが先に、とげ／＼しく苦々しくなつたのか考へてみるがよい。

夫が先に妻に叱言をいふて険しい顔をしたのなら、夫の顔がその

まゝ妻の顔に表れたのだ。妻が先にふくれたのなら、「何と、今宵の主人の恐ろしいこと!!」と、不足を思ふ前に、自分の顔が、そこにあることを知らねばならない。

顔のありどころを、はつきり認識するのが、家庭和樂の大事な問題であると思ふ。

顔だけではない。手も足も智慧も、全てがさうである。

私の手だといつて、大事に懐にしまつておく譯にいかない。私の手で、人の家の壁も塗り、人の家の米も作るのである。

私の足だと、たゞ勞つてゐる譯には參らない。私の足で、人の用

事に飛び走るのである。私の智慧だ、人に貸し與へることは出来な
いとて、自分のことばかりに使ふてをれぬ。私の智慧は人のために
使ふて初めてお役に立つてくる。

私の顔も手も足も智慧も、みな人のために役立つ。そして、人の
顔や手や足で、私は守られ、生かれてゐるのである。

かういふことは、餘りにも平凡な論議かも知れない。しかし、こ
の平凡が、案外に人の世では理解されてゐないのである。

或る所でこの話をしてゐると、

「それで判りました」といふ。

「何が判りましたか」と尋ねると、

「×さんの奥さんのお顔の美しいこと、何時見ても福々しく、に
こやかな譯が判りました」といふ。

×氏の奥さんは、實に御主人に貞淑である。夫によく仕へて、夫
の仕事をどれほど助けてゐるか知れないほどの、勤め振りのよい夫
人である。鴨川の水で顔を洗ふと、肌がきれいになるといふが、日
本の夫人が全部、鴨川まで出掛けることは出来ない。×氏の夫人も
亦、鴨川の水で洗つたのではない。それでも、實に美しい。明る
い。お化粧をしなくても、自然のままの美しさが、光り輝いてゐる

のである。

女は火の性で、男は水の性であるといはれる。夫によく仕へる夫人は、夫といふ水で洗はれるのである。鴨川の水に、如何なる化学要素があるか知らないが、少くとも、夫によく仕へて、不平不満のない婦人は、年をとつても、皺が寄らずに美しく輝かしい肌を持つてゐる。

顔といはず、手も足も智慧も、人の顔であり、手であり、足であり、智慧であつて、よりよく生されるのだ。

一をもつて貫く

楠公を語り楠公を知るほどの人は誰しも、

「七度び生れ代つて國賊を亡さん」

といはれたあの言葉を殆ど反射的に思ひ出す。

楠公はこの不朽の名言を明窓淨机に向つて、思索して残されたものではない。楠公は實に、湊川の戦に利あらずして自らは全身針鼠のやうに矢を受け、最後に刺し違へて自刃するそのときにいはれたのである。

君のために一命をささげ、然もその命の最後にかくいはれたので

ある。

私は今日までこの事實を餘り深く思考することはなかつたが、最近ふとしたことから、「心の力」といふことを考へ、教典第五章の修徳章を熟讀し、更に思ひを練つてゐるうちに、このことに大きな感激を覺えたのである。

私の例でいふならば、私は先年、痔臓出血を起して一命覺束なくなつたとき、お恥しながら、

「七度び生れ代つて人助けに盡瘁します」といふやうな健氣な心は起らなかつた。只苦しまぎれに一切を忘れてこの身を神様にまかせ

切り、命に何の執着も覺えなかつたくらゐるが、せめてもの取柄にすぎなかつた。

死ぬか生きるかの大病のときに既にかういふ有様である。平常の些細な病や苦しみの時は、さゝやかなさんげをするくらゐでとても積極的な勇猛心を起してはゐない。

どう考へても、どう見直しても、自分の心に信用はおかれぬ。心の力に十分の確信を持つことは出来ぬ。

吾々の魂は素これを神様から頂いて、素晴らしい力のあるものであつたことは本教々義にある通り明かである。然しこの心の力が

何故かうも弱くなつたのか、何故かうも自己に執着するやうになつたのか、これも教義に明かなごとく、明淨なる魂には、こりがついてくもつてゐるからである。このくもりを拂はねば本當に心の力は生れぬ。くもりを拭ふがために、吾々は日常に信仰に基いた行ひをなしつゝあるのであるが、何年かゝつても一向に心の力が出来ぬとすれば、修徳の方向が、眞に心を磨くよき砥石とはなつてゐない、しか考へられぬ。

それでは、一體どうすればよいのであらうか。

私は、一年に一つでもよいから人眞似の出来ないやうな苦難の道

を歩むべしであると主張したい。

楠公の全生涯が衆に絶してゐた譯ではない。

南風競はないあの時代に、公はその晩年を、至誠一貫、大君に仕へられたのである。大石内藏之助また、その全生涯が苦難の歩みではなかつた。浅野家が平穩であつた頃は、寧ろ凡庸の一家老にすぎず、時には、餘り役に立たないといふので、「晝行燈」とまで呼ばれたくらゐである。その最後の一瞬が人の意表に出た道を歩いたのである。

歴史に残る忠烈なる人々のみちすがらを見れば、皆かうであると、いつでも大過はあるまい。

然し、最後の瞬間に至つては、他に動かされることなく、苦難の道を貫き通すことは、並々の精神では行けない。その根柢には、天地に通ずる「まこと」がなければ出来ぬことである。

人まねを超越した素晴らしいことゝいふものは、かりそめの思ひ付きや發心では出来ない。何でもないやうでも、眞に神様にすがり切つた「まこと眞實」でなければ――

こゝにおいて、私は楠公の「心の力」に感到すると共に、楠公の至誠に更に大きく感到するのである。

楠公は國民的忠誠の儀表と仰がれ、不朽に輝くその事蹟は、現

在、後世にどれほど國民精神を振興してゐるか知れない。このことが既に楠公の生命をして永遠たらしめてゐるのであるが、更に卑近な例をもつていへば、神戸の「瓦煎餅」は現實に幾千人かの生活の糧となつてゐるのである。「瓦煎餅」はいふまでもなく楠公の忠烈を讃へるゆかりの名物であるが、楠公の「まこと」はこの小さな現實においても、人を生じてゐるのである。

又、大石内蔵之助は、歌舞伎の「忠臣蔵」となつて多くの俳優を生し、幾十萬の觀衆に感激を與へてゐる。芝居が流行らなくなれば、忠臣蔵をやればよいとまでいはれてゐるくらゐだ。

かういふ事實を考へた時、「まこと」は天に通じ、宇宙と同化して、天地が萬物を生成化育してゐると同時に、人を生ずる絶大なる力のあることを知るのである。

そこで、私は、本眞劍に神様のお導きに従つて、年に一つだけでも、人眞似の出来ないことをしてゆくのが、何よりも吾々の心を磨く砥石であるといひたいのである。かうして積み上げた「まこと」でこそ、眞に人助けの力となるのである。

吾々のつとめは、人助けがその第一義である。そしてこの人助け

の資本は、「まこと」以外に何物もない。「まこと」なしでは物は育たない。況んや、人助けなどの出来やう筈はない。

富士山の景色は何時見ても素晴らしい。殊に夜汽車に乗つて曉闇にその麗姿を車窓に眺める時は、旅の疲れは一度にけし飛んでしまふ。然しそれは、僅かの時間しか見られないからである。これが昔の旅のやうに、毎日々々見てゐたのでは、どんなに立派な景色でも嫌きる時があるものだ。

私は、人生に疲れてゐるやうな人を見ると、少し長旅にあきてゐるのではないかと思ふことがある。富士山は美しいが、そのふもと

を堂々巡りばかりしてゐて、景色に馴れてしまつて感激を忘れてしまつてゐるのではないかと思ふ。

かういふ時は思ひ切つて方向を變へてみる事だ。思ひ切つて飛躍してみる事だ。景色が變れば心機また自ら新しくなる。

この意味においても、私は年に只一つ人まねを超えた行ひを提唱してみたい。八方美人にならなくてもよい。「一をもつて貫く」この精神に立つて、勇敢に「まこと」を貫く事だ。

阿呆の功名

越後の田舎から東京へ行くと、
「東京といふところは生馬の目を抜くほどのところだ。決して油断はならんぞ。ポヤ／＼してゐると、だまされて丸裸にされてしまふ。だから、人を見たらどろぼうと思つても間違ひはない……」

と教へられた。教へられた通りにやつて、結局私は丸裸になつてしまつた。だまされて、なつたのではない、だまして、なつたのである。

それから、このみちの信心に入つた。先づ第一に教へられたこと

は、
人を神と思へ

といふことである。まるきり、反対の言葉である。しかし、私はそれに違ひないと思つた。初めは、人をどろぼうと思つてゐたのである、それで失敗をしたのであるから、今度は、その逆を行かうと決心した。

人を、どろぼうと思つてゐると、一つの話をするにも、一つの取引をするにも、「だまされてなるものか」といふ氣持があるからとても骨が折れた。人よりも自分が賢うなければ、何一つとして出来ないのです、もといふない智恵を絞るのに、大變な苦勞をした。實際

だまされまいとする努力は並大抵ではなかつた。

人を神と思ふことは、それに比べると、遙かに通りよい道であつた。これには、計略も智謀も機略も一切が不要であつた。たゞ、心を低うして、頭を下げてをればよいのである。初めは馬鹿らしいと思つた。こんなことで何處に生き甲斐があるかと思つた。男子の面目のない、意氣地のないこの生活に、どうして大事業が完成されようぞとも思つた。

しかし、その中に、私の生きてゐるといふこの事實は、神恩、君恩はいふも更なり、多くの人々の恩によつてあるといふことを知つた。

人は自分のことをして生きてゐる者は一人もゐない。すべて、他人のことをして生きてゐるのである。會社員にしても、大工にしても、商賣人にしても、そのやつてゐることは、人のことばかりである。

人のことをしてゐるといふのは、すなはち、國家社會のお役にたつてゐるのである。國家社會のために働いてゐるから、そこに與へられるお金は、全日本國中、何處に持つていつても通用するのである。

人に生されてゐることがわかれば、吾々は、

恩

に生されてゐることも自ら領ける筈である。

何といふことなしに忙しい私は、教會の終ひ風呂に入るのが大抵、夜中の一時か二時、もつと遅い時は三時頃になることもある。静かに、お湯に浸つて、湯氣の中をちつと見てゐると、たゞ有難さが胸に迫つてくる。

「結構——有難うございます、勿體なうございます」

思はず獨りつぶやくのである。今日も一日多くの人々の御恩によつて過してきた。何も出来ない自分が、かうして無事に勤められる

のは、たゞ人この眞實の心盡しによる、と思ふと、有難さと勿體な
さとの外に、何があらうかと思はれるのである。

この恩に報いねばならぬ。形に、心に、言葉に、一つ／＼報いて
ゆきたいと念願する。人に生されてゐる以上は、生きてゐる限り、
この報恩の生活であつて、それでよいと思ふ。

ところがこゝに一つの抗議が出る。

「そんな日常茶飯事までも恩に感じて報じてゆけば、報恩倒れをし
てしまふぢやないか」

私はこの辯に黙し難い。曰く。

「年々に恩を報じるところが多くなる。結構だ、それだけこの身が

廣くなつたのぢやないか。身を廣くしたいと願はぬ人はない。それ
でゐて恩報じを忘れてゐる世の中だ。願ひ叶はぬのも當然だよ」

人の恩の集大したものが天恩である。故に人恩を報じ得ない者は
天恩の報じやうもない譯である。更にいへば、人の恩すら判らぬ者
に、天恩の知り得よう筈がない。

恩が重なると身が細る。身が狭くなる。四方八方が詰つて来る。

丁度、重箱に入つたやうな姿である。

窮しても天に通ずる道ありといふ言葉もあるが、この場合、人の
恩も果し得てないのだから、天に通ずる道も塞がれてゐる。全く、
重箱住である。

我が身思案は、かういふ生活に出て来る。

物を見ても、聞いてもそのまゝを受け入れられない人がある。我が身思案の人である。有體でない人である。

春雨に濡れて山路を行く。思ひ立つた漫歩で傘もない。まゝよ、春雨だ、濡れて行かうと、シットリと雨にぬれ、旅衣の袖も重たく歩む。折から鶯の聲を聞く。とたんに、あゝ鶯だ、いゝなア、と春深き蕭々たる山雨の景に見入つてゐる。この時、私は詩興に入つてゐる。詩興にも入つてゐる。天地自然に溶け込んで、有體のまゝにある時、詩人でもあり畫人でもある。

これも亦、我が身思案のない境涯である。

我が身思案のない境涯は理に向つて直進出来る。そこに、信仰の妙もあり面白さもあり、楽しみもある。

人の世に雑音の絶える時がない。

非難、陰口、愚痴、泣言、すべてこれ人生の雑音である。

思ふに、雑音に心をわづらはされる時は、信を失へる時であり、雑音に超然たり得る時は、理にもたれきつてゐる時である。風邪をひいて五體に弛みがある時に外の病菌が喰ひ入つて来るやうに、心に信を失ふてゐるのは既に、心が弱つて雑音といふ間食でも食べた

状態になつてゐるのである。

「あなた、御用も御用でせうが、今日は寒いのですから、一日くらゐ、ゆつくりなさいませよ」

「さうかなア」

これは、つい、うつかりと誘ひの手に乗つてしまふのである。

私は、私の主義として、妻がどうあらうとかうあらうと、それを問題にしない。一人でグン／＼と上に伸び切る。

だから妻から「薄情者」のそしりを受ける。人が病氣をして苦しんでゐるのに、心配一つするでなし、様子はどうかと尋ねるでなし、いゝ氣になつて高鳴をかいてゐる。あんたは薄情者だといはれ

るが、私は私で理の世界にグン／＼と翼を伸してゐるのだ。人間らしい心配はしないが、理の思案だけは一人で腹の底にきめ込んでゐる。

再び、我が身思案といふことに戻るが、私は、おだてに乗る人は我が身思案のない人だと思ふ。私はかういふ人を好むし、自分も亦その類に属する人間だと思つてゐる。

「あなたは偉いですね、よくやりますね」

といはれると、つい嬉しくなつて、それではもつとやりませうかといふ氣になる。

これは確かに阿呆の境地である。——奴またおだてゝゐるな、そんなおだてに乗るものか——等と、人の心を解釋しないのである。いはれたらいはれたまゝ、そのまゝを受けてゆく。神様はたしかにかういふ人に手柄をさせて下さる。かういふ氣分になれば、私はこの世はどんなに明るいことかと思ふ。

或る先生が部下の田舎の宣教所に巡教した。教會では初めてお出でを願ふのだといふので種々準備をした。そして、床に何も懸けるものがないからといふので、村の大家さんから軸を借用してそれがかけたものだ。

ところが、先生、それを見ると實に驚いた、立派なものだ、まさか、この宣教所にこのやうな立派なものがあるとは思ひもしなかつた程立派なものだ。

そこで、歸る時に、初めて來た土産にこの軸をゆづつて貰へないかといつたところが、婦人擔任さんは、鮮かに承知致しました、どうかお持ち歸り下さいと出たものだ。

しかし、借りものである。一存ではどうもならぬ、早速大盡さんの家に出掛けて願ひ込んだが、あれは家傳來の家寶でゆづる譯にいかんといふ。さういはれても彼女は一步もひかない、そこを何とか願へないか、たとひ、家屋を抵當に入れてもお金をこしらへるから

どうか譲つてほしいと頑張る。

大盡さんは遂に彼女に負けた。といふよりは彼女のその信にほとほと感心した。そしてこゝに一案を提出した。

「そんなに仰有るなら、その先生とやりに私が一つお金でお許し願ふことにしよう。あれは時價に見積つて、××圓である。そのお金は私が貴女にさし上げる、どうかこれで了解してもらつてほしい」
こゝまで理解のある話をされては、この上無理をいふ譯にはいかない。遂にその××圓で解決がついたのである。

さて、その後日譚として、村の大盡さんは彼女の鮮かな信仰に惚れ込んで信者となり、何くれとなく教會の力となるやうになつたのである。

軸の立派さを褒められて我が物のやうに喜び、土産にと所望された時、それを見事に受けたその鮮かさ。私は、この婦人の信仰にホトホト感心する。そして、このやうなおめでたさには、理窟なしに參つてしまふのである。

運命の鐘

「藤藏先生、この頃の私はどうでせうか。以前のやうな妙な持前性を分を出してゐませんか。貴方に憤激されて、九死一生の危地に追ひ込まれてもう三年になります」

「さうですね。今のところは先づ及第してゐるが、油断はできない。君といふ人間は、徳がないから、一寸した功名をしようと、すぐ浮調子になる」

「なか／＼手酷しいですね。しかし、仰有るとほりでせう。油断はいたしますまい。三年前に決心したケ條を常に忘れないやうにいた

しませう」

「時々僕と語ることですな。僕を忘れちや駄目ですよ。何かの場合には僕と語つて、僕の聲を聞いて反省するのですな」

「毎月、一度は必ずあなたを訪ふてをりますが、これではまだ少いでせうか」

「結構です。その訪問を意味あらしめるやうに、もう少し僕の話静静地に聞いて下さい」

「私はいつも逃げ腰になつてゐますか」

「さういふ譯ではないけれど、落着きがない。僕は君の運命を拓いてやりたいと只管に願つてゐる。この僕の眞剣な氣持を汲みとつ

て、ときには三年前の思ひ出話に耽けるのもよいと思ふ。人間といふやつは、喉元すぎると直ぐ熱さを忘れてしまふ。僕は實に情なくてしようがない」

「有難うございました。それでは今日は一つ静かに思ひ出を語ることにいたしませう」

昭和十三年六月八日、私の教會では分教會に昇格したのでその奉告祭を舉行した。續いて、その月の十四日、私は多勢の教會の人々と共に、東本大教會に御禮の御挨拶に罷り出た。

時は恰も初夏である。天地は新緑に燃えて潑刺としてゐる。私も

亦、今は全てを終へて五月晴のやうな氣持になつてゐた。

六月十九日。その日の夜行で神戸へ歸らうと思つてゐると、「今日は一つ子供の仲間入りをなさいますよ」と誘はれた。東本の子供會が陸軍病院へ慰問演藝に出かけるのである。それで、私にその大將を勤めて、開會の挨拶や何彼の世話をしろといふのである。子供達は子供達で非常な騒ぎである。今日こそ、傷ついた兵隊さん達をおなかの底から笑せようと意氣込み、めい／＼に私を取り圍んで、「おぢちゃん、僕の役はとても面白いのだから見落しちや駄目だよ」と喧しい。私はふと、子供達とかくれんぼう遊びをした良寛のことを思ひ出した。

良寛は、墓塚の陰にかくれた。何時までも何時までも隠れてゐた。その中に、子供達はあそびにあきて歸つてしまつた。それでも良寛は今に鬼が来るか来るかと待つてゐた。やがて村人がそこを通りかゝり、良寛の可笑しい姿を見付けた。「良寛さん、何をしてゐるんですか、そんなところで」といふと、「しッ、やかましい、鬼が来るよ、見つかつちや駄目ぢやないか」といつて、一生懸命に隠れてゐた。

良寛の物語りの数多い中に、私はこの無邪氣な良寛を日頃から最も好んでゐた。それで私も遂に子供の仲間入りをした。喜びごとのあつた後で童心に立ち歸つて遊び呆けるのは、何ともいひやう

のない心楽しいものである。神様が、かういふ縁をお恵み下さつたのも、つまり、生れたばかりの分教會を育てるには、會長たる私が三つ子の心になつてやれ、とお教へ下さつてゐるのだと思つた。心が、いそ／＼としてゐるときは、全てが喜びの種となるものである。

さて、陸軍病院でお晝の御馳走になり、いよ／＼開會の段取りにかゝつてから、私は急に激烈な腹痛を起した。最初は何か物あたりでもしたのであらうと考へてゐたが、痛みは刻々と猛烈になるばかりである。場所が病院のことであるので、軍醫さんは早速と注射を

して下さつたが一向に利きめが見えない。何時までも、病院のお世話になつてゐることもできないので、苦しみの中を漸く大教會の宿舎に歸り着いた。痛さは一向にゆるまなかつた。寧ろ酷くなるばかりである。

それでも、家内も側の人々も、胃瘰癧だらう、奉告祭から引續いての過勞と、呑み過ぎが一度に出たのであらうと思つてゐたくらゐで、別に深い思案を巡らさなかつた。

十九日の夜はたゞ苦痛に更けて、苦痛に明けた。痛みは相變らず、時間的に襲つて來た。その痛さは言語に絶してゐた。よく、七轉八倒の苦しみといはれるが、私の場合はまだその上であつた。

「痛い!!」といつたきり、身動きならぬのである。さうして、身軀中に、ねとくの膏汗がにじみ出るのである。苦しみも亦極れば沈黙である。痛いとか、苦しいとかいつて身もだへの出来る時は、なほ、その苦痛に餘裕があるのであると思へた。

痛みが激しいので、私はさんげする心のゆとりを持つてゐなかつた。必死の場合は、誰しも心の中で神名を唱へて合掌するものであるけれども、私はそれさへ忘れてゐた。きり／＼きり／＼痛むその中にあつて、全神經がそれに集中し、助かりたいとも思はない。痛みが治つてほしいとも思はない、どうしようもない痛さに身も心も任せきつてゐたのである。

この境地を外から眺めると、そこには人間思案がなかつたといふことになる。全てを神様の前に投げ出して、神様のなさるまゝに捨てゝゐたといふことになる。

お助けの度に私はいつたものだ。

「何も考へないで、身体ごと神様に投げ出すのですよ。我が身思案があつては駄目だ。生死を超えて、一切を神様に任せざるのですよ」しかし、かういふ境地には容易になれるものではない。私自身がその経験をしてみ始めて理解できた。

私の場合、苦痛の餘りに人間思案を巡らす心の餘裕がなく、その結果到達し得た無の境地なのであるが、思へば、頭脳が冷靜に働く

時に、見事、生身を投げてかゝることの難しさをしみくくと味ふのである。されば、何時でも身体を投げてかゝつて神の御命のまゝに動けるならば、信仰も亦至れりといへよう。少くとも、いざといふ場合にはかくありたい。焦らず騒がず、靜かに身体を投げてかゝりたい。

靖國神社に齊き祀らるゝ護國の神々は、何の苦痛もないその生身を、神に捧げられたのである。常人の能くし得ないその絶巔の境地に、全心身火のごとくに燃え立つて突き進まれたのである。

二十日の晝を過ぎても、夜となつても容子は悪化する一方であつ

た。今はもう、胃瘧とは思へなくなつた。折悪しく大教會長は大島の六踏園へ出掛けられて御不在、奥様一人に何彼と御心配をかけた。そして、一度お醫者さんにみて貰つてはと、馴染の福井醫師を呼んで下さつた。これが二十日も更けて午後の十時であつた。その時分に私は腹膜炎を起してゐた。下腹部から胸部へかけて大鼓のやうに膨れ上り、皮膚がキン／＼に張り切つて鏡のやうに光つてゐた。

福井氏は頭をかしげた。

「どうもこれは只の腹膜ではないらしい。ことによると……」
ことによると、といつた福井氏の頭に、この瞬間、或はさうかも

知れない。いやたしかにそれに違ひないといふ暗示がひらめいた。それは福井氏自らが八年前に痔臓を病んで、九死に一生を得たことがある。以来今日まで一度その患者に巡り會ひたいと念願して、未だにその機会に恵まれません、今宵圖らずも私にそれらしい様子を見たのであつた。

「私は、どうもすゝかゝのやうに思へるのですが、それならばとて私の手にあひ兼ねますから、すゝかゝの權威者を呼んで頂き度いのですが……」

「では、どなたにお願いするのですか」

と家内が尋ねると、

「鹽田博士です、是非これは博士にみてもらひたいのです」

博士の名を聞いて家内はびつくりした。そんな有名な先生に来てもらつてよいものかと私に相談に来た。

「どうします、来てもらひますか」

「日本一の博士に手を握つてもらへるなら結構ぢやないか、来てもらへ、来てもらへ……」

苦しい中につても、嬉しいことを聞くと直ぐ子供のやうにはしやく私であつた。家内も、

「あなたは子供のやうだ」といつて笑つた。

それにしても、夜も十一時である。今頃から来てもらへるかしら

と思つてゐたが、福井氏が迎へに行くの間もなく来て下さつた。

博士は見當であちこち押へて、こゝが痛くないかと聞くやうなことをせず、いきなり腹の一部をグツと押した。

「こゝが痛いだらう」

「あッ、いたッ、たゝゝゝッ」

「やつぱりすゐざうだね。こゝが頭なんだ、出血してゐるらしい」と考へ込まれ、

「明朝までが危い」

といはれた。

狭い部屋のこと、枕元にゐる家内にさういはれるのが私にはよ

く聞えた。餘りいゝ氣持はせず、いよゝ己もこれでおしまひかと思ふと、お葬式の様子がまざゝと目に浮び、誄詞の言葉がスラスラと脳裡に讀まれてゆくのであつた。

ともかくもとて、應急の處置に、全身麻酔や血止め等、五六本もの注射がうたれた。

全身麻酔薬が利いて痛みが治つた。が氣にかゝるのは腹膜である。福井氏が、

「先生、これは一度出してしまつた方がよいのではないでせうか」と相談したが博士は受け付けない。

「ふぐや蛙の腹をたゞくとふくれるのと同様だ、出しても又すぐ膨

れるせ。すゝがうが根本的の病元だから、これさへ治めればいゝのだが……」

といはれる。流石は大家だ。いはれることが全て自信に満ちて力強い。私は感心しながら聞いてゐた。

痛みが止つたので、私は冗談をいつてみたくなつた。

「出さうなもんだよ……」

といふと、皆、クス／＼と笑ひ出した。

「危篤の病人を前にして、笑ふとは何事ですか」

博士は又立腹される。

「いえ、おなかのものが、出さうなもんだよといつてゐるのです

よ、出さうなもんだよ石原たけのこ——と歌にあるでせう。餘りを
かしいので……」

と家内も笑ひつゝいへば、博士もいつか怒りを解いて微笑を浮かべ
てをられた。

鹽田博士といへば、すぐにも濱口首相の臨終が思ひ浮ぶ。あの時
は、出さうに思はれる一發のガスが出なくてとう／＼いけなかつた
のである。今私は腹の中にガスが充滿してゐる。このガスは人力で
出しても駄目だと、博士はさつきいはれたばかりである。私は、神
様が出して下さると信じてゐた。それで「出さうなもんだよ……」
といったものだが、葬式の様子を空想してみたり、冗談をいつて笑

つてみたり、明朝までの命が危いといはれてゐるのに、不安も覚え
ず焦てもせず、況んや愁歎場を見せもせず、たゞ稚氣に満ち／＼て
ゐた。

鹽田博士の説明を聞くと、すゐざうは胃の後ろにあつて、肉類を
溶かす消化液を造る内臓器關である。だから、すゐざうをいためて
若しこの液が外部に流れ出せば、肉類を溶かすこの液は、忽ちにす
ゐざうそれ自體を潰滅さして了つて、一命を失ふことになるのであ
る。

私の教會の役員の有本氏の令弟が、やはりこの病氣で發病後四日
で出直した。私と同様に鹽田博士に診て貰つたが、手をくれであつ

た。参考のためにとて解剖すると、すゐぎうの入口に蛔虫が入り込んでゐて、そのために液がすゐぎう内に充滿し、やがてすゐぎう壁の毛穴から浸み出てそのあたりを溶かしてゐたのである。

二十日の夜は痛みの止るまゝに、初めて私は悟りの世界に入ることが出来た。

以上のすゐぎうの説明を前提として、私はさんげした。

第一に、私は有頂天になつてゐたと思つた。恩を忘れて、小生意氣にも、俺が、私かと振舞つてゐた。自分では恩報じに生きてゐるつもりでゐても、意識しないところに、思はぬ大きな天恩を重ねてゐたのであつた。恩を重ねた私は、すでに一人前の人間ではなかつ

た。自分では天晴れ振舞つてゐるつもりでも、天から見れば、本来の我を失つた、人間關係治の小まつしやくれた振舞ひでしかなかつたのだ。

第二に、さういふ人間が剃刀を持つことは危険この上もないことだ。剃刀は大人が使つてこそものゝ役に立つが、若しも子供の頭具となれば、どんなに危いことであらう。私が正にそれであつた。恩さへ判らない奴が、生意氣にも教理を説いてゐたのである。

第三に、私はたゞ神様のお恵みに陶醉して、徳を積むことを忘れてゐたのである。支那事變はすでに始つて一年になる。いよ／＼長期抗戦だといはれる。國家は將に非常の秋である。この秋に教家は